
巡る異世界記

ポリビアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巡る異世界記

【Nコード】

N9823M

【作者名】

ボリビアン

【あらすじ】

普通の高校生黒神 椿はある日突然神に殺された！？ 送られた最初の世界は魔法先生ネギま！の世界！？ はたして、椿は新しい世界でなにを見るのか？ 異世界主人公最強物、この作品にはオリジナルキャラ、テンプレ、原作レイプなどがあります。またこの作品は作者の処女作品です。また、ご都合主義も多々含まれております。原作イメージを壊されたくない方や嫌悪感を抱く方は戻ることをお勧めします。最後に作者は物語を書くというのをしたことがないので、更新は不定期になるかもしれません。

それでも、構わない！！　という剛毅な方はせめて楽しんでいただければ幸いです！！

追記　タイトル変更しました。

ブローグゝ終わりの始まりゝ（前書き）

ああ・・・とうとうやってしまった・・・
影響されてついつい、手を出してしまった。
思いつきで書いてしまいました…。
駄文ですが生暖かく見てやってください。

プロローグ〜終わりの始まり〜

）
）
）
）
）

SIDE——?????

とある所に、男とも女とも子供とも老人とも捉えられる者が空中に浮かんでいた……いや、正しく表現するならば、空中に立っていた。

こんな所で何をしているのか——

「ああ、なんか楽しい事ねえかなあ……」

ただ暇を持て余していただけである。

「ん？」

何かないかと下を見ると、一人の少年が歩いているのが目に入った。

「お？ こいつは……暇つぶしにも使えるしちょうどいい。楽しくなってきたな……」

ニヤリと笑うとこいつはその場から薄れるように消えていった――

SIDE——少年

「はあゝ…今日も疲れた、早く家に帰って寝よ……」

このダルそうにしている黒髪の少年の名前は、黒神 椿くろがみ つばき

椿は17歳で今年高校3年生になったばかりである。

今日は始業式だけだったので午前中に終わり、今は学校から家に帰っている途中である。

「明日から高3か……受験生…はあゝかったりいなあゝ」

椿は勉強も運動も並程度で特にこれといって特筆するようなこともない、どこにでも居る普通の高校生……ちなみに、D——チェリーボーイである。

「今日もいつも通りの日を過し、いつも通りに家に帰り、いつも通りに寝て。はあゝ退屈した毎日…正直うんざりしてくる、何か面白いことでも起きないかな」

などつぶつぶ言いながら歩いていたら、急に右側から強烈な光を感じ、なんだ？ と右を見てみると、目の前にトラックが迫っていた。

「なっ!？」

椿はとっさの事で体が硬直し回避するのが遅れた。そして、その遅れが致命的だった。

ああ…死んだよなこれ？ ……まあ別に思い残す事もなくもないが。なんてついて無いんだろか……どうせ死ぬなら、もう少し大人の階段を駆け足で登ってから死にたかったなゝ

「くう〜いつてえ〜な……………　　っ　　たく一体ここは何処だ？」

先ほどの痛みも引いて落ち着いてくると、起き上がって周りを見渡した。

「なんだ、この黒い空間は？　……………　　というか、俺はなんで寝ていたんだ？　確か学校が終わって、それから……………　　あっ……………」

——　　そうだ、思い出した！　考え事してよそ見してたら急にトラックが右から迫ってきて……………　　轢かれたんだよ、な？　俺、死んだのか？　いや、なんとなくあの轢かれ方は即死レベルだった気がする……………　　てか、冷静になって良く考えてみると、そもそもあの路地にあんな大きなトラックが通ること自体おかしいぞ。

「意外に落ち着いてやがるな？　それに、いきなり頭突きとは……………　　さすがの俺でもあの不意打ちは効いたぜ？　おかげで、まだ頭がひりひりしてやがる……………」

と、目の前からそんな声が聞こえてきた。

「へ？　ああ、すみませ……………　　って誰だあなた！？」

「ん？　ああ〜私か？　私は——　　神だ！！」

「かみ、髪、紙……………？」

「一つも正解がないではないか！！　私は神様なんだ！　どうだ！！！！」

とにやにやしながら、そう言ってきた。

「ああ……はい、そうですか。それじゃ、俺はこれで……」

どうだ……！　と言われても……とにかく、若干タイ人だ、と言うことは分かった。

「タイ人って……さすがに、傷つくぜ？　というか、ちょっと話くらいは聴いていこうじゃないか？」

まだ絡んでくるよ……って、さっきから俺の考えを読んでいるのか！？

「っ！？」

「そんな警戒しなくたって平気だって、別にとって食いはしないよ。というか気付くの遅すぎだぞ？　そんなに鈍かったら世の中渡って行けませんよ……」

いやいや、警戒するなって言うほうが無理だろ。

いきなり目の前で“自分は神だ……”とか言われたら誰だって疑って警戒するよな？　それに、なんで最後母親口調なのさ……。

「はいはい、神（笑）ですね。ワロスワロス」

とにかく、適当にあしらって誰か頼りになれそうな人を探そう……。

「ねえ、そろそろ泣いてもいいよね？　というか、そろそろ説明に

入らせてもらえない？ それと、ここには君と私以外いないのだけ
れど」

「一々人の心を読むな！！ 居ないって……じゃあ、ここは一体何
処なんだ！？」

「おいおい、質問に質問で返すなつての。ちえゝ面倒くさあゝ」

「なっ！？ 面倒くさいってなんだよ！？ いいから答えろつての
！！」

「ああゝはいはい、わあゝつた、分かったからそうカリカリしない
の。カルシウム足りてないんじゃないの？ 以外に冷静な奴だと思
っていたんだが、そうでもなかったな……クククッ」

「誰も居ないのは、此处がお前の精神世界だからだ」

「俺の精神世界？」

「ああそうだ、そしてお前はこの神たる私に選ばれたんだ。今から
お前を異世界に送るから。因みに、拒否権は無し」

「え？ は？ ……ちよ、ちよつと待ってくれ、選ばれたって何だ
よ？ それと、異世界に送るって？」

「ああ、選ばれたって言うのは、ちよつと何か面白いことがないか
なゝと探してたところにちよつとお前が歩いているのが目に入って
ね。それで、お前をつかって異世界で遊ばせて見ようと思ったわけ」

「自分も楽しめて、お前も楽しめる。どうだ、一石二鳥だろ？ つ

いでに好きなだけ能力をあげるぞ？　簡単に死なれちゃ困るからな
クククッ」

そして、あることに思いついた。できれば、間違っていてほしい
と思いながらも俺はそいつに聴いた……。

「もしかして、あのトラックってあんたの仕業……なのか？」

「ん？　よく気付いたな、存在を消してやっても良かったんだけど、
それだと後が面倒なので、手っ取りばやく死んでもらうことにした
のさ」

「なっ……」

その、余りの身勝手な理由に俺は絶句した。理不尽にも程がある、
それじゃあ何か？　自分が楽しみたいがために俺を殺したって言う
のか？　そう思いたった瞬間俺はコイツに殴りかけたい衝動に駆
られた。

だが、仮にこの自称神のコイツを殴ったところでなにか変わるわ
けではなく……俺は、なんとか衝動を無理やりに押さえ込み、断れ
ないか聞いてみた。

正直こんな神と関わったら絶対に良くないことになるのは、分か
ったから――

「俺は別にそんなものいらない、誰か他を当たってくれ。そして、
俺を天国に連れていけ、それが生き返らせろ」

「この状況をよく考えてみようか？　いまお前の魂を握っているの
は、この私だ。このまま握りつぶして天国へ逝くこともなく、ただ
消えるか？　それに、最初に拒否権はないと言ったはずだ。仮にも
生き返ったとしても、スプラッタ状態のお前が生き返ったら軽くホ

ラーだぞ？ それと、私はお前の事を気に入ったのだ。こんな面白い玩具おもちゃ簡単に手放すわけ無いだろうが」

「——っ！？ ふざけるな！！ 貴様の玩具になった覚えなんてないし、そもそも勝手に殺されて“はい、そうですか。”なんて納得できるか！！」

「強情だね、君も。ふう……過ぎたことはしょうがないじゃん、細かいことは気にすんなよ、つばき君」

「気色悪い声だすな！！ つか、細かくねえよ！！ 人の人生ダメにしといて細かいってなんだよ！？ あんた、それでも神！？ むしろ、神だから人一人くらいどうでもいいの！？ ねえ！？ だったら、神じゃなくて、邪神だろうが！！ この責任どうしてくれるの！？ つか、なんで俺の名前知ってんの！？ それより、さつさと天国に連れてけやああああ！！！！」

最後は何を言ってるか意味不明だった……。というか、良くこんなに一気に喋れたものだと思う。俺、良く頑張った。

「ぜえ ぜえ……。はあ……。叫んだら、もうどうでも良くなった。騒ぐだけ疲れるし……。それで、俺にどうしろと？」

「落ち着くの早いな？」

「もう、生き返れないんだろ？ というかあんたも手放す気なさそうだし……。だったら暴れても、叫んでも意味ないだろう、それに異世界にいけるしな？ だったらとことん異世界を満喫してやる」

「ほう……その柔軟さますます気に入ったぞ。クククッ」

「邪神なんかに入られても、うれしかねーよ。つか、こんな邪神気に入れられてたまるかっての」

「まあそう言うな、それとおれは邪神じゃなくて渡り神だ。あらゆる異世界を渡り歩いてたのさ」

「はあ?? 渡り神? そんなのに気に入られるなんて、どこまでついてねえんだよ……」

「まあそう言うなって、ああそれから異世界っていったが次の3つから選んでもらうから。えーと、リスト、リストと」

「「てててん」異世界リストおー! “リリカルなのは、Fantasy night、魔法先生ネギま!”だ。さあどれにする?」

「……で、なんでその3つからしか選べないんだ?」

「（無視された……）あ、ああ……それはだな、私が好きな世界ベスト3だからだ!! ちなみに、良く更新されます」

「そうだな、この3つからなら“ネギま!”の世界に行きたい。それから容姿は裏僕のゼスで髪の色は漆黒、瞳は白銀で」

「（また、無視された……ぐすん）“ネギま!”の世界だな? 裏僕? ちょっと待て、お前の意識から読み取る……ふむふむ、お前ハーレムでも作る気か?」

「いいだろ、別に……。単に俺の理想だ、それにハーレムなんて作る気はない。面倒なだけだ」

「ふむ、面倒ねえ……。能力はどうする？」

「今から考えるから、少し待っていてくれ」

・
・
・
・
・

「よし、それじゃあ能力はこれで……。できるか？」

- ・ 型月のキャラ召喚権限
- ・ キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの能力
ゲート・オブ・バビロン
- ・ 王の財宝
- ・ 投影・練成能力
- ・ 固有結界能力
- ・ 超回復魔法能力
- ・ 瞬間記憶能力
- ・ 完全記憶能力
- ・ 魔眼：鑢 七実の見稽古
- ・ 魔眼：存在否定
- ・ 電子操作能力
- ・ 永遠式「始原ノ風」
- ・ 終焉式「終焉ノ炎」

「ああこれくらいなら、平気だ。ただ、魔眼に関しては多少のり

スクが発生するが、それでも構わないか？」

「ああそれで構わない」

「好きなだけ能力をやる、とは言ったが……ずいぶんとチートだな？」

「反省はしている、だが後悔はしていない。つかこれくらいしない
と原作のバグキャラに勝てる気がしない」

「ま、いいさ……こつちも簡単に死なれると面白くないし。因みに
魔力は木乃香の100倍、気はラカンの10倍ね？ それと、不老
不死に肉体変化も付けといた、それから必要なものについてはあつ
ちに着いたら送つとくさ」

「分かった、因みに行く時の時期は？」

「ん？ 大体原作の100年前だな」

「なんで、そんな昔に送るんだよ！？」

「修行時間が欲しいかと思つて。んで、区切りがいい100年前に
した」

「ふむ、確かに修行時間は欲しいな……分かった、100年前で頼
む」

「それじゃあ、せいぜい楽しませてくれよ？」

そういいながら目の前に真つ白い扉を出現させる。

よし！ と扉の前で気合をいれていざ潜ろうとしたら、ふと足元に違和感を覚えた。

「ん？ 一体なん……………だ？」

見ると足元に大きな穴が開いていた、と同時に落下特有の浮遊感が襲ってきた。

「ちょ、え？ はあああああああああ！？」

「じゅつくりっ」

見ると満面の笑みを浮かべた渡り神がいた。 あんにやろっ……ボケをひたすら無視してたの根に持ってやがったのか！！

「やっぱり、アンタは神じゃなくて器の小さい邪神だあああああああああああ！！！！！！」

椿は穴から落ちながら薄れいく意識の中で、次にあったらぶっ飛ばすと心に堅く決意したのだった。

「暫しさよならだ椿……まあ、いずれまた会っだらうけどね。それまで、私を楽しませてくれよ？ 神の道化^{私の玩具}、くくくくくくっ」

S I D E - o u t

ブローグゝ終わりの始まりゝ（後書き）

自分的にはこれが今の限界です……。

もつと文才がほしいです（泣）

もし、こんな駄文でもよければつきあってあげてください。
よろしく願います！！（切実）

感想や意見などがありましたらどんどん送ってきてください。

読みにくかったので、大幅に修正しました。

設定資料（9 / 6 更新）（前書き）

主人公の設定情報です。

新設定や新キャラなどが出てきたときなども、追記していきます。
順次追記予定。

設定資料（9 / 6 更新）

主人公

名前

黒神 椿くろがみ つばき
↓ツバキ・クロガミ

性格

冷静沈着、また興味の無いものには殆ど無関心。
世話焼き。新たに、面倒くさがり属性が……。

年齢

10 / 20（主人公の好みで普段は18歳の姿）

身長

普段は185cmくらいになっている。

容姿

男：裏切りは僕の名前を知っているのゼスの姿で瞳は白銀、指だしの黒のグローブと上着に銀の装飾が施された漆黒のジャケットを着ている。

女：顔は凛々しい方、黒髪ロングのポニテ、瞳は紅くなっている。
見た目、性別、存在否定が使えなくなった事以外は特に変わりは無い。

ステータス（New!）

筋力：EX

瞬発力：S+

俊敏性：EX

視力：SSS -
耐久：SSS +
幸運：C -
カリスマ：C +
宝具：EX
魔力：EX（木乃香の100倍）
気：SSS（ラカンの10倍）
対魔力：S
対気：AAA +
適正：基本全属性に適応有り。
好んで使う属性は、闇・雷・氷・光・影の5属性。

鷹の目：視力の補正により得た。何km先にあるものでも、鮮明に見る事が出来る。

心眼：新たな身体のス펙が高く、また高い演算能力もあるため得ることが出来た。

未来視（偽）：高い演算能力と記憶力と長い間に培った経験で得た能力。あくまで推察の域なので本物の未来視ではないのだが、的中率はほぼ9割を占める。

能力（New!）

（型月のキャラ召喚権限）

・ぶっちゃけ型月キャラを召喚する能力

ゲート・オフ・パレロン
（王の財宝）

・一応全ての真名を開放できる、生物をいれても腐らないので使い勝手がいい。

└ 投影・練成能力┐

・ Fate の衛宮士郎 / エミヤ の能力の上位版、投影したものは本物と変わらない。しかし、真名開放は不可能で UBW も使えない。

発動ワードは「トレース・オン投影開始」、止めるときは「トレース・オフ投影終了」

└ 固有結界能力（夢幻世界）┐

・ 自分が死ぬか、許可しない限り絶対に破られない。一日に一回が限度、魔力を殆ど持っていかれる。それでもネギとほぼ同等の魔力がのこる。味方には希望という癒しを見せ、魔力や気などを回復させ、敵には絶望というこの世全ての悪を見させ精神を殺す精神操作系の結界。精神と肉体はリンクしているという概念が結界に込められているので、悪夢を見せられたものは必ず肉体に異常が現れ最悪死に至る。ただ、最早結界などと言う代物ではなく一種の世界として成り立っている。

夢幻世界と命名。

発動ワードは「絶望に染まれ」

└ 超回復魔法能力（神の栄光）グローリー・オブ・ゴッド┐

・ 機能停止から余り時間が経っていない、又は死んでいない限りフルに回復させる魔法。しかし、魔力や気を回復させる事は不可能また、死んでしまったものを生き返らせることも不可能。後にツバキ自身が神の栄光と命名。グローリー・オブ・ゴッド

└ 瞬間記憶能力┐

・ 一瞬で書いてあることを読み取る。驚異的な演算能力と思考能力が可能

└ 完全記憶能力┐

・ 目に映ったものを詳細に記憶する能力。

〈見稽古（魔眼）〉

・刀語りの鑢七実の能力、見ただけで相手の技をコピーできる。魔眼の一種。常時発動している。

〈存在否定（魔眼）〉

・力をフルに開放した場合、眼に入ったものの存在を完全に消し去る魔眼。力を50%だけ解放する事により部分的に消し去ることも可能。しかし、フルに発動した場合、反動で一日女性化してしまう。その間は存在否定の使用不可。反動の影響が眼が紅くなっている。修行によつては数十分以上はフルで使つても反動が来なくなる様になる。

ON/OFFのスイッチが可能。

発動ワードは「否定」

〈電子操作能力（邪神ノ雷）〉

・とある魔術の禁書目録インデックス／とある科学の超電磁砲レールガンの御坂美琴の能力。生体電気を操つて情報を読み取つたりなど意外に使い勝手がいい。電気分解もできる。自身の魔力との融合により魔力、魔法で起こつた事象、現象すら分解可能になった。邪神からもらった能力なので「邪神ノ雷」いかづちと命名。発動ワードは「イカヅチ」

〈永遠式「始原ノ風」〉

・天川天音の否定公式の主人公が持つ能力。時を操れる、巻き戻したり進めたり等意のまま。しかし、時を止めたりするのはできない。また、力が強すぎ暴走を起こすため長時間は使用できない諸刃の剣。発動ワードは「狂え」

〈終焉式「終焉ノ炎」〉

・天川天音の否定公式のヒロインが持つ能力。対象を消滅させるまで消えない黒い炎を操る。ぶつちやけNAR。TOのアマテラスみ

たいな感じです。すでにある事実を焼失させることも可能。
発動ワードは「滅せよ」

く不老不死く

・歳をとらず、死なない。そのまんまの意味。

く肉体変化く

・肉体年齢が変わるだけで能力はさほど変わらない。基本肉体年齢に精神年齢が引っ張られる。

くキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの能力く

（化け物語りより最強の吸血鬼美女さん）

・眼力・

意識して睨むだけ。タイムラグは無し。かなり細かいコントロールが効く模様。

・物質創造能力・

こころわたり
心渡（怪異をきるのに特化した刀）を創造できる。他にも色々創造可能。宝具などの創造は不可能。

・再生能力・

全て血を吸血されない限りどんなに肉絨毯にされようが瞬時に再生することが可能。

・エナジードレイン（吸血）・

齧り付いて血を吸う事で存在自体を吸い取れる。相手を存在ごと吸った場合、相手の能力を自分のものとして使うことが出来る。

・変身能力・

翼を生やして飛行可能。影潜り（出入りは一瞬。長期間入ったまま
でok）。闇になれる。姿を消す事も出来る。霧になれる（霧そ
のものになる。移動可）

デバイス

名前

ルカ

性格

比較的温和だがたまに黒い所がある。
ツバキ第一なマスター想いのお姉さん。

能力 - 順次更新

魔力カートリッジ搭載、半径5kmの3Dマップを表示可能。無詠
唱を可能にしてくれる。

能力共有（第一話にて活躍。カートリッジを消費し主人公の能力使
用する。しかし、能力によっては使用不可能だったり消費が半端な
く使い所が難しい。）

魔力、気、熱、空間の歪、風、臭い、音、光の屈折などから探知す
る事が可能、探知能力にかなり優れている。

モード

・1stモード・

朱色をした指輪型。補助に特化している、待機モード時もこの姿。

・2ndモード・

緋色の2丁銃。魔法を銃に装填することが出来る、装填した魔法に
より付加効果がある。

いわゆる銃の闇の魔法ver.氷系などで冷気を纏っても持ち主に
は影響はない。

主に中距離〜遠距離の後方支援型。しかし、ツバキはガン「カタと言っ銃と武術を混合した戦闘術で接近格闘戦も可能にした。

・3rdモード・

?????

外見

・食料などといった物と一緒に送られてきた、指輪型魔力媒介兼デバイス、色は朱色。因みに女性人格で名前はマスターから名づけてもらった。主人公の母親的な位置を獲得しつつある、趣味はツバキの成長記録「THE TUBAKI」を撮ること。最近影が薄いことを気にかけている。密かに主人公に立つフラグをバッキバキに折ろうと主人公を誘導する計画をたてている——準ヒロインにはあるまじき行為まっしぐら——新感覚ダークヒロイン!?

第一話〜前途多難な第二の人生〜（前書き）

と、言うわけで第一話をお送りします。

相変わらずの駄文ですが、それでもバツチコイな方はどうぞごゆっくりと生暖かい目で見てください。

それでは、『魔法先生ネギま！』偽善者の理想郷』どうぞ……！

少し修正いれました。

第一話　前途多難な第二の人生

しん　　　　　

SIDE——ツバキ

ああどうしよう……これが絶対絶命ってやつか？ あ、俺死なないんだっけか？ まあいいや、とにかくやばい、どれくらいやばいかって言う……すごくやばい、マッハで命の危機が迫ってきている。

何故そんな事を言っているのか……それは、四方八方を大きいミミズ？ 共に囲まれているからだ。もつとも体調が4m近くもありそんな奴をミミズと言うのただけだな？

よし、こいつらをミミズもどきと命名しよう……というか凄く気持ち悪いです。

何か一匹ボス——さっき周りにいる小ミミズもどき呼んだのこいつだし——みたいな馬鹿でかいミミズもどきがいるし……なんだよあれ、他の奴より倍近くあんじゃないかねえの？ イジメだろこれ……。

男の癖に情けないと思った奴……想像してみろよ、周りに埋め尽くさんばかりに巨大なミミズもどきがいる所を……。

その手の苦手な奴はトラウマものだぞ？ 正直俺も、早く此処から逃げ出したいです……。なんとかして逃げられ「グルグルルルウウウウ……」　　ないよなあ。

「いきなりの戦闘で相手がこいつらかよ？ はあ……こんな所に来るんじゃないかった」

そう、一人でつぶやいた言葉は誰もいない洞窟に寂しく木霊していった……。

『というより、さっきの爆発の所為では？』

「……………反省しています」

相棒のルカの一言で、せっかくのシリアス感が台無しになってしまった……。

『自業自得じゃないですか……………』

「心を読むなよ……………」

『顔に出てましたよ？』

「……………」

この時、絶対にポーカーフェイスを習得しようと思った。何か俺の感が身につけておけと警告を発しているような気がする。

「それよりも、こいつらを片付けなきゃな……………」

『そうですね、補助は任して下さい』

「少し……………いや、結構きついが相手してやるよ……………お前らまとめて輪切りにしてやるっ！……！」

俺が叫ぶと同時に周りのミミズもどき共も襲ってきた。

~~~~~  
約三時間ほど前  
~~~~~

上を見上げれば清々しいほどの澄み切った青空、眼下には樹海と
いっても差支えが無いほどの木の群れ。緑がまぶしいです……。森
林浴とかしたら気持ちよさそうだなあ。今日も絶好のスカイダイ
ビング日和です。

なぜ、このような状況になったのかと簡潔に言つと、どうやら大
気圏すれすれから落とされたらしい。あまりの寒さと息苦しさでお
目々がばっちりさ……。まあおかげで、地面と熱烈なキスする前に
目が覚めたのは良かったんだがな。

そう、覚めたのは良かったんだ……良かったんだが問題は――

「どうやって、着地するか？ なんだよな。せつかく目が覚めても
手段が思いつかないんじゃないじゃ結局地面とキスすることになるしな……
はあ、あの邪神扉をくぐらせようと見せかけていきなり落とした
がって……」

ほんとにどうしよう……

う……む。

ポク、

ポク、

ポク、

ポク、

ポク、

チンツ！？

あ、確かハードアンダーブレードの能力に変身能力があったはずだ！！

たしか、翼を生やせて飛べるはず！！

「そうと決まれば早速実践つと……つてどうやればいいんだ？」

ここまできて重要な事に思い至った。

「俺……能力の使い方知らなかった……」

どうする？ 思っている間にもどんどん地面が近づいてくる……
万事休すか？

いや、考えろ、まだあきらめるには早い。とりあえずイメージが大事だよな、うん。

「どうせ、駄目で元々だこれで出来なきゃ地面とキスでもなんでもしてやるさ」

そして、俺は早速イメージを始めた。

翼、つばさ、ツバサ、羽……天使のような翼……いや、吸血鬼の蝙蝠みたいな翼……。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………顕現せよ、俺だけのつばさあああああ！！！」

そして、少しイメージした後、カツと眼を見開き思い切り叫んだ。正直他人が見ると、痛々しいことこの上ないが、そこは全力で気にしないようにした。

しばらくして背中あたりに不思議な感覚を感じると同時に落下の速度が急激に落ちていくのが体感できた。

そして、背中中の辺りを見てみるとそこには真つ黒な3対の翼が俺の背中から生えているのが見えた。

「成功……した……んだよな？」

成功したばかりで、まだ上手く翼を操作できなかったが何とか地面との激突のフラグは避けられたみたいだった。

「ふう……一瞬成功しなかったと思ってヒヤッとしたぜ……」

「しかし、よく見るとまるで悪魔か堕天使みたいな翼だな……」

そうなのである、ツバキが創造し顕現させた翼は天使の翼を真っ黒に染め上げたかのような見事な漆黒の3対の翼だったのである。

「ふう……まあ、それは兎も角これでひとまず安心かな?」

しかし、ここで安心して気を抜いたのがいけなかった……。

まずはじめに、能力の操作の仕方を知らないこと。そして、ぶっつけ本番で上手く調整できず、まだ翼が非常にあやふやで不安定な状態だったのである。

当然そんな状態なのにさらに気を抜いたりなんかしたら――

ガクン!!!

そんな擬音が似合いそうな感じとともに急に体が傾いた。

「あ、れ?」

驚いて後ろを振り向くと、さっきまであったはずの漆黒の3対の6枚羽がなくなっていた……。

「あ、やば……いつ!?」

その声と共にツバキの体は再び落下を始めたのであった。

「俺のバカ野郎おおおおおおお!……!」

そうして、体はみるみる地面に近づき――そして、

グギャッ！……！！」「ゴふッ？！」

なんだか体から鳴ってはいけないような音が聞こえたと同時に鼻腔と口内に血の臭いと味が広がっていった……。

暫し^{しば}地面と口付けを交わしたまま倒れていた。痛みが引いてきた所で、ムクリと起き上がった。

「……………ペッ」 べちゃっ

口から血溜りを吐きつつ、ゆっくりと自分の状態と周りの状況の確認をし始めた。

「最初は絶対に翼を固定化する修行をやるう……」

「しっかし、凄いな……さすがチートボディーだけはある……もう、傷が完治してやがる。最強の吸血鬼ってだけはあるな回復力がすさまじい……」

たとえ回復力がすぐくても痛いには変わらないけどな……。

「まあそれは兎も角、改めて周りを見ると森っていうより樹海って言ったほうがしっくりくるなこれは……」

そして、目の前には大きい樹木があった。

「おお——こ、これは……」

「……凄く……大きいです」

大きい樹木を見たら、なぜか言いわなければいけない気がしたのでとりあえず、言ってみた。

特に深い意味は無い。

「あ、そうだ。そういや、あいつ必要なものはこっちの世界に着いたら送るみたいなのを言ってたな……」

注意深く周りを見渡して見るがそれらしきものは見当たらない――

「うん？ …… おかしいな、確かに送ると言っていた筈なんだが？」
そういい歩こうとしたら、後ろのほうでとくに背中付近から「カサリ…」と音がしたので、振り返ってみた。

「ん？ 気のせいかな？」

そして、足元を見るとそこに一通の便箋が落ちて入るのが目に入った。

「…………… あれ？ どこから現れた？」

さてよ…………… 確か、背中あたりから聞こえたんだよね？ と言う事は…………… 背中に貼ってあったって事なのか？ いつのまに？

「はあ…………… いちいち、あの糞野郎邪神に目くじら立ててたらストレスでマジで死にそうだからやめとこ…………… それよりも、早く手紙を見ているか」

ペラッ——

「拝啓：私の“愛しい奴隷”という名の玩具へー

この手紙を見ている、ということは無事に着地できたんだね！

まずは、“おめでとう”と言っておこうかな？ かな？ パンパカパ〜ン♪

晴れて君は立派な異世界人となったわけだが…………… 少々問題が発生したんだ。世界の抑止力って知っているか？ 簡単な話、世界が元のあるべき姿に戻ろうとする力のことなんだが、ここで先ほど

言った異世界人というワードが出てくるんだよ。君を送った世界：“ネギま！”の世界のことなんだが君が元々この世界にはいなかった存在だ。もちろん、魔法世界にも旧世界と呼ばれるところにもね？

それで、世界の修正力が関ってくるんだけど……つまりそっちの世界が君という異物を排除しようとする世界の力が……そこで、だ……こっちとしても、せっかく手に入れた君を、送った早々失うのは癪なんで時間と共に世界が君になじむ間として原作の100年前じゃなくて800年前の魔法世界に送つていたから

それから、そっちで必要になるだろう金や食料なんかも送つといたからな。とりあえず、リストアップと魔眼のリスクだ。

リストおよび魔眼のリスク

- ・金銭・

1000万程入れておいたから原作開始からにでも使うように。

- ・食料・

600年分の食料は入れておいたぞ。後は……自分でどうにかしろ。

- ・魔導書（魔術書）・

ありとあらゆる魔術が載っている魔導書だ。新しい魔術が出るたびに更新するようになってる、ちなみに古い魔術とかは上書きされないようになってるから。

- ・武術の書・

剣術や槍術などをはじめたありとあらゆる、武術を収めてある。

・魔法球・

原作でエヴァが使っているやつだ、中身は南国リゾート風においた。外での1時間が中での1日にしておいたから。金も食料もその中だ、後で王の財宝にでもしまっておけ。

因みにその魔法球、竜が100匹乗ってもだいじょぶ、噛みつかれてもびくともしない優れものという設計だ!!!!

・魔法媒介・

原作でエヴァが持っていたような指輪型の魔法発動体で魔力カトリッジ搭載デバイスでもあるぞ。指輪の周りに宝石が10個ついているだろ？そこに魔力を込めればいいだけだ。おまけで、非殺傷設定も可能だ。

それから、半径5kmの3Dマップを表示可能なのと、そいつをつけている限り無詠唱で魔法を使うことが出来るから。後で名前でも付けておけ。因みに色は朱色だ。

・魔眼のリスク・

見稽古ともうひとつに、存在否定つてのを頼んだろ？見稽古のほうはべつにノーリスクでもいいんだが、もう一つの存在否定の方が強力すぎるから一応反動……リスクをつけることにした。

まず存在否定を使うとリスクとして、反動で一日女性化してしまうから。ちなみに克服不可能です（キリッ

それから、女性化の間は存在否定が使用不可能になる。それでも使おうとすると失明および暴発で自分が存在ごと消し飛ぶ可能性があるから。間違っても、無茶しないように。

まあ完全に使いこなせれば、リスクなしで相手の一部分を消すことができるようになる………かもな。

「がはっ!？」

「……………」

ガバツ!!!!!

「ってなにしてた貴様わあああああ!!!!!」

ヒュン!! ドゴオ、バキツ!!!! ズガアアアアアアアア
アアアアン!!!!

ハッ、しまった!! 思わず近くにあった大木を力の限り殴って
しまった。そのせいで、大木一本をなぎ倒してしまった……でも決
して、俺は悪くないと思う、うん。

今のはさすがにだれだって怒ると思うんだ……でも、名も知らぬ
大木さん、ごめんね。君への償いはあいつにさせるからね!

はあゝ……でも、通りで巨木ばっかだと思った……だって、これ一本一本幹の太さが大人100人分くらいありそうなんだもん。俺が住んでた現代にはこんな大木がいつぱいの森なんて見たことないし……。

というか、あいつカグラって名前だったんだな……今、初めて知った。それよりも、俺がいつあいつの愛しい奴隷なんかになったんだ！？ まあいいや……いや、良くないけどここで、ぶつぶつ文句言っても始まらない。

というより「まあいいや」が口癖になりつつあるな……直していかないと。そして、いつの間にか目の前に置いてあった魔法球と朱色をしたリングを手にとった。

「ほう……これが、魔法球か。んで、こっちがデバイスと……」

ヴィイイイン

『起動シマス……機能、仮動作異常アリマセン。マスターの認証ヲ、才願イシマス』

「ああゝ……名前、名前……ツバキ・クロガミ」

『ツバキ・クロガミデスネ……認証完了。次ニワタシノ名前を登録シテ下サイ』

「うゝん……「ルカ」……うん、君の名はルカだ」

『……登録完了。コレヨリ再起動ヲ開始シマス。……「ルカ」起

動ヲカイシシマス』

『「ルカ」起動確認……機能・動作共に異常なし。素敵な名前をありがとうございます。術式などに関しては、指輪から直接マスターの知識が流れてきますので一々組み込まなくても問題はありせん。これからよろしくお願い致しますね、マイマスター。』

「了解だ。これからよろしく頼むなルカ。後、俺の事はマスターではなく、ツバキでいい」

『はい、マ……ツバキ』

「……それでいい。それと、2nd、3rdモードとかはあるのか？」

『あ、はい。一応2nd、3rdモードはあります。しかし、現在はロックされていますね……』

「ロック？ ……カグラの奴なんでロックなんか掛けたんだ？」

『おそらくですが、まだツバキが使うには早いのかと……』

「つまり、俺が強くなれば使えるようになるってことか？」

『すみません、ツバキ』

「ん？ なんて、謝るんだ？」

『ツバキの悪口を言ってしまったので……』

「悪口って……本当の事だろ？ 別に悪口なんかじゃない。だから、謝らなくていい」

『はい…すみません。あ………』

「はははっ、まあとりあえず……辺りを散策してみるか。ルカ、マップを頼む」

『は、はい。了解しました』

ブオオオン……

すると、指輪から3Dの立体映像のマップが飛び出してきた。

え？ なにこれ、すげえ……リアル過ぎるだろ、これ。

「あれ？ ここに何かあるな………」

此处から、南東の端のほうに洞窟みたいなのが見えた。

『天然の洞窟ですね。此处から南東に約2、5km程の所にあります……どうしますか？』

「よし、その洞窟に案内してくれ。そこで、今日は休むとしよう。今日は色々と疲れたしな………」

『了解しました。今ツバキから見て5時の方向に進んでください』

「5時…5時……っと、分かった」

ルカの指示に従い、5時の方向……南東の方向……に向かって進み始めた。俺は歩きながらも能力の訓練をはじめた。

「まずは、翼だな……いざって時の逃げる手段が増えるしな」

『考えが後ろ向きですよ、ツバキ……』

「ほっとけ……。さっきは状態が不安定だから気を抜いたら、維持できなくなっただんだよな……」

そういつと、俺はもう一回イメージを始めた。

「イメージだけじゃ不安定なら名前でも決めるか……」

『名前……ですか？』

「ああ。そうだな、黒翼………はどうだ？」

『実に安直ですね………』

「何事も単純が一番だ。よし、黒翼！」

そういつと同時に背中から6枚3対の翼が生えた。心なしか先程よりも、感触がしっかりしている様な気がしないでもない。うん、出来は上々のようだな。

「ふむ、一応は成功したみたいだな。ためしに少し飛んでみるか……」

「ルカ、一応周りの警戒を頼めるか？」

『はい、ツバキ』

そして、翼を動かし少し空中を飛んでみることにした。断じてこのまま楽をして、洞窟まで行こうとしているわけではない……あくまでも、能力になれるためだ。

「慣れてくると意外と飛ぶのって楽しいな」

『すごいです、ツバキ。こんなすぐに翼の扱いをマスターするなんて……』

「ん、そうか？」

『そうですよ！ 私のマスターとして誇らしいです！』

「そ、そこまで言われるほどでもないと思うけどな……。まあ悪い気はしないな」

意外に翼の制御は早く終わったし、次は何をしようかな……。

「そうだな……次は投影でもしてみるか」

『補助に関しては私に任せてください』

「頼む」

補助をルカに任せて、俺は投影を始めた。先ずは、刀を投影してみようか……。一度やってみたかったんだよね。

誰だって、あの背中には憧れるよね！！ あ、衛宮士郎の方じゃ

なくて、英霊エミヤの方ね？　では、早速……………こほん。

「トレースオン
投影開始」

そういつと、左手に一本の黒刀が投影された。

「おお、すげー！」

『上手くいきましたね』

「ああ、もう一本ほど投影してみるかな」

『どうします、一旦ここで休憩してから洞窟に向かいますか？』

「いや、休憩しなくてもいいだろ。飛んだままでも練習は出来るしな。このまま洞窟に向かう、後どのくらいで着く？」

『この速度ですと……………だいたいあと10分といったところでしょう
か』

「そうか、それじゃあこのまま一気にいくぞー！」

そういつと、一気にスピードを上げた。しばらくそのまま進むと……………といっても、ほんの少しの間だが…目の前に入り口が隠れるように樹と大量のツタに覆われている洞窟を発見した。

「ここか……………少し、ツタが邪魔だな。さっそく投影した刀の切れ味を試さしてもらおう」

俺は手に持っている先程投影した二刀の刀でツタを切り始めた。

ザシュッ
ブチッ
ザシュッ
ブチッ
ザシュッ
ブチッ
ブチッ

・ ・ ・ ・ ・

しばらく斬っていたが……余りにもツタが多く絡まっ
ていて切り辛く、しかも硬く刀が少し欠けてきていた。

「チッ、これじゃ限^{きり}がないな……面倒くさい爆破させるか……」

『え？ 爆破ってなにを……？ ちょ、ま、マスター！？』

「本当にすみませんでした……」

そして、ルカと共に洞窟の中に入っていった。

「意外と乾燥しているんだな」

『非常に硬い岩盤だから、崩れることはないですよ』

「そんなの分かるのか？」

『ええ、あなたの能力を少し借りましたが……電子操作能力でしたっけ？』

「へえ、そういう事も出来るんだな。とにかくここら辺で今日は寝るとするか」

フワ……

「ん？ 何か臭うな？」

『臭いですか？ ……ッ！？ ツバキっ上です！！ 避けてくださいー！！』

「上？ 何言っ 「ゾクッ」！？」

突然背中と首筋に悪寒を感じ殆ど本能でその場から、飛び退いた。それと、同時に背後でものすごい音が聞こえた。

ズシィィィィィン……！！

そんな音と共に洞窟自体が揺れた。

「つつつ……おわ、なっなんだ!？」

後ろを振り返り見ると、そこには巨大なミミズが佇んでいた……。いや、正確にはミミズみたいな奴……だ。

「な、何だよコイツ……………」

「この主ですかね？ さっきの爆発で怒らせちゃったとか……」

「マジですか……。少し前の俺をぶん殴りたい……」

(「グルルルオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!」)

「ッ！？」
「今度はなんだ！？」」

「!? 多数の生体反応を感知!! ものすごい数です!?!」

今の巨大ミミズもどきの咆哮で洞窟のいたるところから先程のミミズもどきよりふた周り位小さい奴らがたくさん沸いてきた。

「今日は本当について無いな。というか、こいつら何処からこんな
に沸いてきたんだ？」

『とにかく逃げるか、掃除しましょう』

「掃除って……まあそうだな。でも、これはさすがにイジメじゃな

いか？」

『頑張つて下さいツバキ。ツバキならできます！！』

はあゝ本当にどうしよう……これ。というか、どこからそんな自信が湧いてくるんだ？

そして、期待されているのが微妙にプレッシャーとなってさらに鬱な気分……。

~~~~~  
閑話休題      ~~~~~

ザシュツ    ザシュツ    ザシュツ    ザシュツ……グシャアア

投影で小さい投げナイフ10本創り出し、投擲した。

「壊れた幻想！！」

ズガンツ、ズガンツ、ズガンツ、ズガンツ、ズガンツ、ズガンツ、ズガンツ……

〔グオオオオオオオオオオ！！！〕

ズシイイン……

数匹まとめて倒すが、一向に減る気がしない。

「まさか、こいつら無限に沸いてくるとかじゃねえよな?」

『そうですね、無限には沸いてきませんがこのままではギリ貧ですね』

「だよな……!? 「シュツ」壊れた幻想」ドゴォォン

「王の財宝でも使うか?」

『そうですね、その方がいいかと思います。やり方は念じれば発動しますよ』

「分かった。少しの間援護を頼む、魔力はまだ使い方が分からないから勝手に俺から吸い取ってくれ」

『Yes , my master』

そう言つと俺は投影をやめ、集中を始めた。

「ルカ、準備が整った……洞窟が崩落しないように注意しといてくれ』

『全力でやる気ですか?』

「ああ……といっても、まだ扱いきれないから充分な威力を発揮できるかわからないけど、そこは頼むぞ?」

『はあ……分かりましたよ。でも、さっきみたいに無茶だけはしないで下さいね?』

「分かつてるって、王の財宝! ……全力全弾発射あああああ  
あ!」

背後から大量の宝具が雨あられのようにミミズもどき群れに降り注いだ。

ズドドドドドドオオオオオン

発射が終わると、砂煙で視界が利かないのでルカに生き残りがいないか確認させた。

「ルカ生き残りがいないか確認頼む。さすがのボスミミズもどきも死んでいると思うが……」

『——1匹反応確認。反応確認……ボスミミズもどきです』

『あの……ミミズもどきだと長いんで、ワームって呼びませんか? 長くて言い難いですし?』

「ん? ……別に良いんじゃないか?」

砂煙が晴れるとそこには所々緑色の液体を垂らしながらも、ドシ

りと構えているあいつがいた。

「見かけ通りのタフ野郎か……。ボスだけはあるな、ルカ一気に終わらせるぞ」

『どうするんですか？』

「エルキドゥ天の鎖を使って拘束した後、終焉式〔終焉ノ炎〕で片をつける」

『了解』

「天の鎖！！」

王の財宝から金の鎖が伸び、巨大ワームに巻きつき拘束に成功した。

「グルオオ！！　グルオオ！！」

巻きつかれた巨大ワームの方は暴れて鎖から抜け出そうとするが、一向に抜け出せる様子が無い。

「よし、今のうちだルカ！！」

『準備OK、いつでもいけます！』

両手を前に突き出し、技を発動した。

「終焉式…終焉ノ炎！！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオ

両手から黒く禍々しい炎が鎖で拘束されている巨大ワーム目掛けで、放たれた。

その黒く禍々しい炎は、瞬く間にそいつを飲み込みさらに周りに散らかっていた元ワームだった物も巻き込んで、全てを燃やし尽くしていった。

「ギュオオオオ!! ギュイオオオ!!! ギュグルオオ.....」

そして、最後まで抵抗していた巨大ワームが力尽き、辺りには静けさが戻った。

「お、終わったのか？」

『生体反応確認します……生体反応ロスト、敵完全に沈黙を確認。もう安全ですよ』

「はあ……安心したと同時に一気に疲れが出てきたぜ」

『お疲れ様です、ツバキ。初戦闘にしては中々な動きでしたよ』

「そうか? ……結構必死だったからわかんねー」

余裕があるように対応してたが、実際はいつ殺られるか、いつ喰われるか内心ドキドキ、ハラハラだった。

自分でも逃げ出さなかったのが不思議なくらいだ。なんせ今の今まで化け物相手に戦ったことなど、無かったし、転生する前も喧嘩らしい喧嘩もしたことがなく、力もひ弱な部類に数えられる位だったんだ。

なので、よほど緊張していたのだろう。気を抜いた今は体のあちこちから悲鳴が上がっている、しかもだんだん眠くなってきたし……。

「ルカ、あとの警戒頼む。疲れすぎて、もう限界……だ」

『お休みなさいツバキ。最後かつこ良かったですよ……』

最後にルカが何か言っていたような気がしたが、睡魔に勝てずそのまま俺の意識はゆっくりと深い眠りへと沈んでいった。

## 第一話〜前途多難な第二の人生〜（後書き）

どうでしたでしょうか？

作者にはこの戦闘描写が限界です、すみません。

次は、2〜3日後にアップする予定です。

あくまで予定ですので、もしかしたら少し遅れるかも…見捨てないでくれると作者は喜びます。

すみません、調子に乗りました。まじめに取り組ませて期限に間に合うようにがんばります。

それでは、誤字脱字・感想などお待ちしております!!!

閑話：的なものゝルカと少年の初夜ゝ（前書き）

ここで、閑話的なものを投稿ww

ちよい、ちよいはっちやけ気味だった気がしなくもない。

反省も後悔もして……いない！！

今回は結構短いですが、閑話だし……いいよね？

それでは、どうぞ

閑話…的なものゝルカと少年の初夜ゝ

ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ  
ゝ

S I D E ― ルカ

マスターと出会ってから、まだ余り時間が経っていないのに随分と長い間いたような錯覚を覚える。

自分の事を“マスターではなく、ツバキと呼べ”なんて言ってくるし……自分を名前で呼ばせるのが恥ずかしかったのか若干顔が赤くなっていた。少し、「かわいいな……」と思ったのは内緒です♪

マス……ごほんっ、ツバキは冷静沈着に見えてすこし抜けている部分があると思う。先程の洞窟を這っていたツタを刈るときもそうでしたし……。まあそれは置いて……。

『ああもう！！　かわいいなあもう……！！！！』

え、今何をしているのかだって？　気になります？　フフっ、それはもちろん……寝顔を拝見しているんですよ、高画質録画つきで♪私がつけられているマスターの手がちょうど顔の前にあるんです！！　それはもうジャストな位置に！！　それを、撮らずして何が相棒か！！！！

まあそれは置いておき、ツバキの顔ははっきり言ってカッコイイと言われる部類に入と思う。まあ今は“かわいい”が勝っているが。しかし、マスターは今少しうなされている……。

それも当然だろういきなりカグラ<sup>神様</sup>に殺されて、原作から800年も前に送られてきて、しかも先程の戦闘……きっと精神的に疲れたのだろう。

（ルカがカグラや主人公転生について知っているのは、ルカがカグラによって作られたときにそのデータも一緒にカグラによっていると埋め込まれたのである。）

マスターはカグラの事を嫌っているようだが、ルカはカグラがマスターを転生させたのには別の意味があることを知っていた。

『「だから、マスター……いえ、ツバキ<sup>カグラ</sup>神様を余り怨まないであげてください。そして、願わくばあなたがその理由に気づきますように……」』

しかし、先程の戦闘……マスターは“初めてだ”とは言っていたが、冷静に相手を分析し癖を見抜き一体一体的確に対処していったあの手際……しかも、私としゃべる余裕すらあったほどだ。

初戦闘で素人があのように対処するのは中々難しい、いやほぼ無理と言った方が正しいだろう。大概は素人がいきなりあのような戦闘に巻き込まれれば生き残る事自体が奇跡だ。あれは、マスターたるツバキの能力が為せる技かそれとも……。

まあいい今は無事に生き残った事を純粋に喜ぼう。それに、マスターには戦闘の才があることも分かったし。

これなら、大抵の事では死にはしないだろう。いや、私がそうはさせない。絶対に。この寝顔を守るためにも！！！！

それにしても……ああマスターかわいいです。いいです、ナイス寝顔です！こ、こここここれは、永久保存ですね。

あ、そうそう。これは決して、決して盗撮をしている訳ではないですよ？ただ、マスターの成長記録『THE TUBAKI』を撮っているだけです♪

「んう……んっ」もぞもぞっ

ビクッ！？……ふう、どうやら起きなかったようですね。

まだ、しばらく寝顔をとうさ……ゲフンッ、ゴホッゴホンッ！！  
すこし、咽てしまったようですね……ささっ録画を続けましょうか  
……フフフフッ

撮られているとは、露知らず少年は無防備な寝顔を晒していた。

一人の少年と一機のデバイスの夜は更けていった……少年は朝までに貞操を守れるのか！？

ジージー（録画音）

ジージー

ジージー

『ハアハア…ああ、マスター最高です!!』

実に不安だ…。

閑話：的なものゝルカと少年の初夜（後書き）

うん、ちょっとやり過ぎた感じがががが…。

ルカが。々丸に似てきた気がry。（これ以上言つと。々丸ファンの皆様に怒られるので強制カットさせて頂きました。）

ルカはちよつと愛情が深いだけなんですよ、ええ。決して、へ。タイではないですからね！？

今回は如何でしたでしょうか？

閑話なんて書いてないで第二話を書いとけやと思われた方、ちゃんと第二話も書いておりますよ？  
だから大丈夫です！！（何が？

最後に感想・誤字脱字などありましたら、お待ちしております。

## 第二話　込め過ぎ注意！ー（前書き）

相変わらずのgggg感ですがぐぐぐー！

## 第二話　　込め過ぎ注意！……

　　（洞窟内）

SIDE——ツバキ

俺は急にまぶしさを覚えて、意識を覚醒させた。

「うん……？　ここは————あ、確かワーム共と戦った後あのまま寝ちゃったのか……」

『おはようございます。ツバキ』

「んあ？　ああおはよう、ルカ。……ふああ……」

『まだ寝ていますが、いやむしろ寝ましょう』

「んう……？　いや、起きる事にする。少しでも強くなりたいからな、時間がもつたいないし」

『あ、そうですね……』

ん？　何故残念そうな声を出す……？

まあいいか、早速魔法球をだして修行に励みますか……。

とりあえず、王の財宝《ゲートオブバビロン》から魔法球を出して、早速中に入ってみた。

S I D E — o u t

・ ・ ・ ・ ・

）  
） （魔法球内）  
）  
）

S I D E — ツバキ

「……………すごいな」

主人公絶賛感動中

ツバキの目の前には、砂浜に蒼い海。振り返れば中世ヨーロッパをモチーフにしたかのような美しい白亜の城に城の後ろには険しい山が聳え立っていた。

「感動した！！ これをくれた邪神に今だけ感動した！！！」  
主人公絶賛感動継続中

「よし、早速泳ぎに行こう！！」

『ツバキ、修行はしなくていいんですか？』

「うぐつ……そ、そんなの後でも出来るってー」

『時間がないとかほざいていたのは誰ですか……。そんなんじゃ、すぐに強くはなれないですよ？』

「うぐぐつ……。分かったよ、やりますってやればいいんだろー」

『はあ……一通り終わったら泳いでも良いですから』

「おっ本当に？ 俄然やる気が出てきた！！」

『現金ですね』（ボソッ）

「ん？ 何か言ったか？？」

『いえ、なにも。それより、最初は何を修行するんですか？』

「そうだな……確か魔導書もこの中にあるんだよな？ まずは魔導書を片っ端から頭に叩き込もう、ついでに食料も王の財宝に入れとこうかな」

『了解です。と言うことはまずはお城の中ですね、一応データにこのお城の内部構造はインプットされているので案内しますね』

「頼むよ」

大雑把にこの城の構造を説明すると、大部屋が4つに小部屋が8つに教会、大広間、中庭、ベランダ5つ、書庫、キッチン、暖炉に冷蔵庫に冷凍庫……etc

豪華すぎです…つか便利すぎるだろ、何気に現代の頃の物もあるし…。つか、教会っていらなくね？ まあルカにことある毎に質問し、答えてもらいながらも目的の書庫に向かっていった。

『着きました。此処が書庫ですよ』

「あれ、もう着いたの？ 早くない？」

『作者の都合です』

「作者？」

『独り言ですのでお気になさらず』

「ふうん、まあいいや。それより、中に入ってみよう」

キイイ

ボタンッ

「あれ……ここ書庫だよね？」

『間違いなく書庫ですが、何か問題でも？』

「いやさ書庫って言うからてつきり、たくさんの本がこうズラーッってあるのを想像してたんだけど……なんで、一冊しかないの？」

『それは、その一冊に魔法の全てが書かれているからですよ』

「まあ一々本を取りに行かなくて済むのは助かったけどさ、なんか物足りないよな」

『それは、追々考えるとして早速読み始めましょう』

「だな……それじゃ早速読み始めますか」

・ ・ ・ ・ ・

~~~~~30分後~~~~~

ペラッ

「よし、一応全部読み終えたな」

『お疲れ様です、ツバキ』

「ありがとうルカ。しかし、瞬間記憶能力と完全記憶能力があっても此処まで掛かるとは……」

『それほど、膨大な量があったってことですよ』

「しかも、新しいのが増えるたびに追加されるんだろ？」

いつかパンクしたりしないのだろうか？　そう思うと、だんだん不安になってきた。

しかし、ルカは俺の不安を察したのか先回りして言ってきた。

『パンクしたりはしないようになってますね。なんでも、アカシックレコードの応用だとか何とか……』

おいおい、借りにも神のくせにアカシックレコードとかを俺のために使って良いのかよ……。

その所為で、思わぬ火の粉が降りかかってこないだろうな？

「まあ兎も角魔法の知識に関しては一応取得したし、後は試し撃ちも兼ねて得意な属性も調べておこうかな」

『それでは、一旦外に出ますか？』

「そうだな、浜辺でやった方が良さそうだろ。いくら直せるとはいえ、城を壊すのは忍びないしな」

・
・

・ ・ ・ ・

一旦俺たちは城から外に出てきて、浜辺へ向った。

「よし、ここら辺でいいだろ。何か標的みたいなものないかな……」

『でしたら、あそこの岩礁なんてどうでしょうか？』

「んー？ あゝあれかゝいっばいあるし試し撃ちには丁度いいだろ
うな」

よし、そうと決まれば先ずは体内に流れる魔力を感じとる。

魔力に関してはすぐに感じ取ることが出来た、自分の体の中に普段とは違う何かの流れを感じてその流れに集中すれば後は簡単だった。後は始動キーを考えなきゃいけないのか……。

ふむ……よし！！

「サテュロス・ラ・ピュトス・カタルシス、光の精霊1柱、集い来りて敵を討て、魔法の射手、光の1矢！」

ヒュッ………ドガンー！！……岩礁がまるまる一個消えました。

「oh……魔法の射手ってあんなに威力あつたっけ？」

『魔力の込めすぎですよ……。それより、始動キーなんて何時決めたんです？』

単なる魔力の込めすぎだったらしい。ご利用は計画的にだね、次からは気をつけよう。

意味わかんない？ うん、俺も途中から何を言っているのか分からなくなってるから。気にするな。

『ツバキ？』

いかんいかん思考の海に潜っていたらしい。

「始動キーを決めたのはついさっきだよ。即興にしては結構良いと思うんだが？」

『そうですね、良いと思いますよ』

『後は魔力のコントロールさえ制御出来れば、上達はもっと早いかと』

「ふむ……次は違う属性で試してみようかね」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・

」

ここまで、やってわかったことは殆どの属性が出来るということがわかった。

あえて、相性が良いのをあげるとすれば光、闇、雷、氷が一番相性が良かったように思う。影とかは試してないからわからないけどね。あ、でもハートアンダーブレードの能力に影があっただけだから、もしかしたら影にも適正があるのかもしれない。

カツ、カツ、カカツ

「つと…こんな感じかな」

今何をしているかというところ、型月のキャラを召喚するための魔方陣を書いている所だ。そして、書き終わると魔方陣の中央に立ち、詠唱を始めた。

因みに媒介は宝石とかもあったのだが、今回は純粹に俺の魔力を媒介にする事にした。心なしか少し気分が高まり、魔力を多く込めてしまっていたのだが…本人はそれに、気づいてはいなかった。

「――我は告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

」
2時間後」

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！！」

コオオオオオオオオ

「うお！？」

詠唱中に立っている陣から淡く紅い光が放たれ、詠唱終了と共に
強烈な閃光を放った。

それを無防備だったが故にもろに食らい軽く悶絶していたが、何
人かの気配は感じるので召喚は成功したのだろう。ん、何人？

あれ、召喚したのは一人だけのはず……？

疑問に思いながらも、徐々に回復してきた目を開け気配がするほ
うに目を向けた。

「呼び出しに応じ参上した。

——問おう、貴方が私のマスターか？」

おうこの声、この姿はセイバーさんではないか……。しかも、言
ってほしい事を言ってもらえた！！

やばい、生セイバー……お触りOKですか？

「むっ……なにやら不穏な気配を感じましたが？」

そう言いながら此方を軽くジト目で見てくる、生セイバーさん。

「ごくり……はっ!? いかんいかん、俺は変態ではない、俺は変態ではない無心無心無心、無無無無無無……」

「き、気の所為じゃないかな?」

ポーカーフェイスをしながらも必死に悟られないようにする。

「そうですか? ふむ、気の所為のようですね。それではもう一度問います——貴方が私のマスターですか?」

どうやら、必死のポーカーフェイスは気づかれなかったようだ。冷や汗で、背中がびっしょりだ……。

「あ、ああ俺がマスターのツバキ・クロガミだよろしく頼む。クラスはセイバーかな?」

「ええ、貴方を我が主と認め、セイバーの名に懸け誓おう」

と、此処ままで良い雰囲気だったが突然横槍が入った。

「雑種風情が我を無視するとは良い度胸だな」

「やれやれ、英雄王殿は短気で困る。しかし、我々を無視するのはいただけないな?」

「無視するなんて、石にしてあげましょうか?」

「拙者も此処まで無視されると余り気分が良いものではないな」

「おうおう、俺らを無視されちゃ困るぜ?」

「私を無視するなんて……実験台にするわよ?」

「……………」(コクッ)

「まあ皆さん落ち着いて」

「概ねこいつらの言っている事と同意だ」

と上からギルガメッシュ、エミヤ、メドゥーサ、佐々木小次郎、クー・フーリン、メディア、無言のバーサーカーことヘラクレスさん。

そして、なぜか——型月の『空の境界』の住人である両儀式さん（あてがひしき）に、『月姫』の住人の遠野志貴さん（とあのしき）までいる。——wh
y?

「……サーヴァントのみんなはまだ解るが……なぜに、両義さんと遠野さんがここに？」

「それはおそらくツバキが魔力を込め過ぎた所為かと、それでも魔力が余り減っていない事には驚嘆しに値しますが……。——それから、私たちを召喚させるには一々陣など書かなくても呼びかけるだけでこちら側に召喚させることが出来ますよ」

セイバーが皆を代表し俺にそう言って来た。……orz。

またやらかしてしまったのか……次からは気をつけなければ。しかも、魔方阵いらなかったのか……なんか一人ではしゃいでいたのが恥かしい。

「ま、まあとにかく先ずはお腹も減ったし、一旦あそこの城に戻って親睦を深めるということでご飯にしない？」

俺がそう言った途端にセイバーが目を輝かせ、「それならば、早く行きましょう！ 今すぐに……！」

と一人でスタタタタと城へ向って行ってしまった——さすが腹ペコ騎士。

まあ若干一名が「雑種風情と食事することなど出来るか」などと言っていたが、その後みんなからリンチされていた。哀れだ……て

か、あいつあんなに弱かったっけか？
そんなことを思っていると――

「ツバキ、キッチンを借りたいんだが？」

と料理の鉄人ことアーチャーさんがそう申ししてきた。因みにみんなにはツバキと呼んでもらうように言っておいた。
マスターとかそう呼ばれるのはなんだか恥かしいし。

「もちろんいいよ。あ、どうせだったら料理教えてくれないか？」

「ふむ、それは構わないが……修行はしなくていいのか？」

「もちろん修行もやるよ。だから、後で俺の投影見てみてくれない？」

「わかった。それじゃあさっさと城へ行くとしよう、あの腹を空かした騎士に暴れられでもしたら敵わんからな」

「ああ、そうだな」

魔力の込めすぎでセイバー以外のサーヴァントと直死の魔眼コンピを呼び出してしまうというハプニングは起きたが、それ以外は特になにも無く一旦休憩をしようということになり、俺たちは城へ戻った。

「あ、途中からルカがしゃべっていない」

『話し出すタイミングがなかったですからね……もしかして、忘れてました？』

「忘れてないさ、唯周りが濃い人たちばかりだったただけだ」

『それって、遠まわしに私の影が薄いつてことを言っているんですか？』

うおい、ルカが負のスパイラルに嵌まり込んでいる。

「そんなことないさ、今回のハプニングちょっとゴタゴタしたけどいつもはルカも充分に影が濃いつて」

『何か褒められている気がしますが、少し私がネガティブすぎましたね』

褒められている気がしないと言った時には一瞬ミスったと思ったが、特に何も言われなかったのでホッとした。

「兎に角後でルカのことも紹介しないとな」

『そうですね。次は忘れないで下さいよ？』

訂正——まだ根に持っていたようだった。

その後はアーチャーに料理を教えてもらいながら一緒に料理を作りしばしの休憩を楽しんだ。楽しい時間もあったという間にすぎいった。

最後にセイバーの食欲が異常だったということだけ言っておこう……腹ペコ騎士の名前は伊達じゃない。

ここまで、修行を始めてから一日…外の時間で1時間。
先は長い………

第二話く込め過ぎ注意！〜（後書き）

主人公に変態属性が！！

こんなはずではなかったのに・・・どうしてこうなった？

どんどん主人公が変わっていく…早く手を打たねば！！

とまあ、冗談は（冗談でもなかったり）置いておいて。

先日PVが10000を超えているのを見て、二度見ならず三度見をしてしまった作者ですが、亀スピード＋駄文のこの作品を見ていてくれている人がいる事に絶賛舞い上がり中です。

お気に入りも30件になっており、作者はうれしさと胸がはちきれそうです。

ねえいいの？こんな駄文だけど本当にいいのかい！？

コホンッ

ええ〜最後に感想・誤字脱字などがありましたらどしどし送ってください。

感想を書いてくれると作者がもんの凄く喜びます。

それから、見てくれている人にこれからも期待に添えるように頑張
って書いていきたいと思えますので……応援よろしく願います
！！

第三話　ツバキ・クロガミ旅に出る（前書き）

主人公を旅に出させてみました！！

ん～このあとどうしよう…。

一応この後アンケートをとりたいと思います！！
内容は後書きで。。

それでは、第三話どうぞ♪

第三話　ツバキ・クロガミ旅に出る

）　　）　　）　　）　　）

S I D E ― ツバキ

魔法球に入り修行してからもう随分たつ、現実世界では200年くらいが経っていた。いきなり時間が経ちすぎだつて？　だつて、その間特に何も無かつたんだからしょうがない。それに、そんなのを一々書いていたら超大作並みの文になるぞ？

それはともかく修行もそろそろ終えて外の世界で旅に出ようと言う事になって、最後にどれくらい強くなったかを試すために型月のメンバーとサバイバルをしようと言うことになった。

相手は代表で両儀式とアーチャーとキャスター……近距離の式と近距離／＼中距離のアーチャーと遠距離のキャスターと中々バランスが良い。

特に厄介な点を上げるとすれば、キャスターの探知能力の高さだろう。他にも直死の魔眼や単純に白兵戦で高い戦闘力を誇るアーチャーなど色々あるが、俺としては奇襲で各個撃破したいところなのだがキャスターの探知がそれを許さず隠れてもすぐに発見されてしまうのだ。

俺にとっては一番厄介なのである。

それにこれは試験でもあるので、この試合の結果によっては旅は中止になりまた修行のやり直しをする事になる。

・

・ ・ ・ ・ ・

「ルカ、カートリッジは後いくつ残っている？」

『あと3つですね……』

「少なすぎるな……。後はいざって時のブースターとしてとっておくか」

『了解です』

『っ！？ ツバキっ後ろからきますー！！』

考えている間にも死の斬撃は俺の命を刈り取ろうと迫ってくる。そして、ルカが言い終わると同時にナイフが3本後ろから心臓を狙って飛んできた。

俺はとっさにハートアンダーブレードの物質創造能力で腕に籠手を創造させ、飛んできたナイフを籠手ではじき返した。だが、まともにはじき返そうとしても死点を突かれただけなので、柄の方をはたいてはじき返した。

ヒュッ…ヒュンヒュンッ

シュバッ！！

キンッ キキンッ！！

「ちつ、ひとまず逃げるか。ルカ、キャスターの位置特定できたか！？」

『特定完了しました。、此処から2時の方向に500mにいます。強力な認識障害とかなり強固だと思われる障壁を展開しています』

「それなら、貫通と速度を重視した麻痺弾で一気に片をつける。ルカ2ndモード！！」

『2nd mode motion』

俺は言い終わると同時に魔力と気を目いっぱい押さえ込み探知され難くし、ルカを2ndモードへ変形させた。そして、俺の手元に2丁の緋色の銃が現れた。

因みにルカの2ndモードはアーチャーとの模擬戦の最中にロックが解除されたらしい…。

らしい、というのはいつの間にか2ndモード状態のルカを持っていたので何時ロックが解除されたのか正確にはわからないからだ。

「魔法の射手、雷の10矢…銃弾装填」

俺は雷の矢を持っている2丁の緋色の銃に装填させた。持っている銃が雷を纏い、ほのかに白く発光している。

『誤差修正、発射準備完了……何時でもいけます』

「我が放つは一発の弾丸、何者よりも『速く』、如何なるものでも『貫け』」

バシユッ

俺が出した影で音が漏れないように覆ってあったために空気の抜けたかのような音と共に獲物を狙った白い閃光が2丁の緋色の銃から放たれた。

放たれた2つの弾丸は途中で1つになり一本の巨大な槍と化した。
ヒュッ……ズガアアアン！！

『目標に着弾確認………キヤスター完全に沈黙、まずは一人目撃破です』

「凍る大地左銃弾装填、石の息吹右銃弾装填」ガチャッ

やっと一人撃破したか、一番厄介な広域探知魔法が使えるキヤスターが脱落したのは良かったかな。後は、アーチャーと式の2人なんだが多分さっきので別行動という選択は取らないはずだ。

因みにさっきの俺が言っていた『速く』や『貫け』は玄霧^{くも} 皐月^{さつき}が使っていた統一言語っていうやつだ。俺が一回型月から呼んで、使うところを見せてもらって見よう見まねで使ってみたところ一発で出来てしまった。

それを見た玄霧が「……ありえない」とか言ってるが
“俺だから”というと妙に納得された……なんか悲しい。

多分使えるようになったのは見稽古のおかげだろうと思っている、七実だって真庭忍軍の術を見て使っていたし。恐らくそれで、合っていると思う。とそこへ一本の黒い矢が飛んできた。

「ちっ…もう此処がばれたのかよ。ルカ、すまないがもう一度探知頼んだ」

『了解です』

俺は即座に虚空に混じるかのように姿を消した。その直後矢が周りの木々を巻き込みながら爆発した。

「あつぶねえ……さつさこの場から逃げな「ヒュンッ」…おっと」

「まさか、単独で挑んでくるとは思わなかったよ」

「別に単独と言うわけではないさ、心強い後衛がいるからね」

さきほどの位置から移動しようとしたところに式が単独で俺に突っ込んできた。

各個撃破を防ぐために単独での行動はしないと思っていたが、やはり後衛にアーチャーが付いていたか。

あまり自分から他人と関らないような式が1対1で挑んで来るのではなくタッグで来つてことはそれなりに強敵と見られていると思っ
ていいのだろうか……？

「魔法の射手、氷の5矢」

俺は牽制に氷の矢を式に向けて放った。

氷の矢は冷気をまといながら獲物を貫こうとまっすぐに標的に向う。

「甘いつー!!」

ヒュンッ

キンッガキンッ

しかし、式は最低限自分に向っている分だけを直死の魔眼で“殺し”後は全て避けた。

「自分も似たようなもの持つてるから言えた事じゃないが、直死の魔眼ってチートすぎるだろ……」

ヒュッ

ガキンッ

「それについては、私も同感だな」

ダンッダンッ

キキンッ

「言って「ダンッ」……おくが、あれで避けきつたと思わない方が
良いぞ」

キンッ

「それについては心配ない。あのアーチャーとかいうやつがッ「ヒュンッ」 打ち落としてくれるさ」

「ずいっ「ガキンッ」……ぶんと信頼しているじゃないか」

ガッ…ダンッ

ガキンッ…キンッ

「ああ、あいつの腕は信頼するに足るからな……」

俺と式は会話しながらも激しい格闘戦を繰り広げていた。
その最中式が唐突に聞いてきた。

「随分珍しい戦闘術をつかうな、それにいくらその銃を殺しても殺せない」

「ルカの2ndモードが丁度2丁銃だし覚えておこうと思ってね。
何故殺せないかは秘密だな」

俺が使っている戦闘術はガン＝カタと言われる銃と武術を組み合わせたそげ機種の近接格闘術のことだ。

そして、何故俺が持っている銃が直死の魔眼でも殺せないかと言うと俺がその事実を否定しているからだ。今まで毎日修行の後に存在否定をフルに使わず練習していたおかげでかなりコントロールが細かく利く様になった。まあ初めは全く長く持たなかった上にフルに使ってしまい、見事女性化してしまったが……。だが、後持つて数分だろう……。

「ふっ……まあいい、足止めはできたからな」

「なにっ!？」

式が言い終わるか終わらないかの所に投影された剣が2本飛んできた。

「くっ」

ぎりぎりで避けたが良く見ると俺の周りにはいつの間にか同じ形をした剣が囲んでいた。

おそらく、干将・莫耶かんしょう・ばくやだろう・・・誘導されてたわけか。

そこへ、アーチャーが現れ止めという様に背中でクロスさせた手に長さが2mくらいあるのではないかという2本の大きな黒と白の剣のようなもので俺に斬りかかって来た。

「これで、終わりにさせてもらうとするよ……鶴翼三連!!」

ズバッ

ズガガガガアアン!!!

切り裂くと同時に爆発をおこした。

「意外にあっけないものだな……」

とアーチャーが言っていたが、いささか、気が早すぎるぞ？

俺はニヤリと笑うところあいを計り、一気に空中へ飛び上がった。

「「なっ!?!」」

おっ2人共驚いてるな。やっぱあれで、倒されてなかったのが予想外だったのだろうな。

まあ兎も角一瞬できたこのチャンスを俺は見逃さない。

キヤスターを撃墜させた直後に、装填させておいた“凍る大地”と“石の息吹”を開放させた。

「左銃開放、凍る大地発射」

左の銃からすさまじい冷気の塊が発射されそれはすぐに大地へと着弾し、即座に地面を凍らせた。

式とアーチャーは見事にかかり、一瞬面食らったようだがすぐに立ち直り抜け出そうとしていた。

「誰も、一発だ何て言っただけで無いぜ！」　パァァンッ！！

「しまっ……」　ピキッ

「くっ！？」　ピシッ

2人は右の銃から放たれた石の息吹を受けて見事に全身石化した。

「あつやば……やりすぎた、ルカまだ2人生きてる？」

「大丈夫みたいです。それに、このくらいじゃ死なない人たちですし平気でしょう」

「これくらいじゃ死なないって……確かにそうだけどもさ」

「グッジョブでしたよ、ツバキ」

「ルカ……それ、どこでそんなの覚えた？」

「禁・則・事・項です」

聴くだけ無駄だったようだ、気にしないようにしよう。

あ、因みにさっきの2人は俺オリジナル回復魔法で直しておいた。石化程度だったら、数秒で完治するって……。

まあ兎も角城へ一旦もどって旅に出る準備しておこう。

・ ・ ・ ・ ・

「よしっこれくらいかな？」

『食料や飲料以外の使わないものは全てこの中に置いていけばいいですしね』

待機モードの指輪型にもどったル力が確認するように言った。

「これも王の財宝のおかげだな。まあ無かったら無かったで影に収納していたけどね」

『ツバキなら本当にできそうですもんね……』

「照れるじゃないか」

『褒めて無いんですけどね』

「ツバキ殿はもう行かれるのですか？」

「お前はもう充分強い、これ以上の修行などいらんだろ」

「俺はまだまだ戦いたらねえけどな」

「魔眼のほうも充分使いこなしせるようになったしな」

「ツバキ君なら何があっても大丈夫だろうね」

上からセイバー、アーチャー、ランサー、式と志貴である。

「みんな見送りありがとうな。あ、アーチャー後でキャスターに俺が悪かった、ごめん。」って伝えておいてくれないか？」

「ん？ ああ承知した。ちゃんとそのように伝えておこう」

何故キャスターに謝るように言ったのかというのは、あの後模擬戦が終わってしばらくキャスターのことを忘れていて気絶させたまま放置してしまったのである。

さすがに悪いと思い昨日からキャスターに謝っているのである。

「それじゃあそろそろ行くか」バサッ

俺は投影したローブをかぶり魔法球の外へと出て行った。

第三話　ツバキ・クロガミ旅に出る（後書き）

というわけでアンケートです。

この後のツバキの行動をどうするか！？を選んでもらいたいのですが…

- 1 ・エヴァと一緒に旅だろ！？
- 2 ・紅き翼に会うまで魔法世界でひと暴れしかない！！
- 3 ・番外編でどこかにタイムスリップ！？
- 4 ・冒険なんかしないで、さっさと紅き翼と合流させとけよ。

の4つから1つ選んでもらいたいのです。

一応なにも来なかった場合は「4」にしようかなと思っていたりいなかったり……

追記ですが、

締め切りは明後日の10日午前23:59までとさせてもらいます！！

最後に誤字脱字・感想などがありましたらどしどし送ってください。
それでは、アデューノシ

第四話〜旧世界へ！目指すはワラキアの地〜（前書き）

ええ〜大変長らくお待たせしました…orz

アンケートの結果ですが「1」がもつとも投票数が多かったため、エヴァと旅をさせることにしました。

といっても今回はエヴァを探すところまで、です。

次回からエヴァを登場させるつもりですよ^^

あんまり長く書くのもあれなんで、第四話へどうぞ♪

第四話　旧世界へ！目指すはワラキアの地

くくくくく

SIDE——ツバキ

俺は今ロンドンのゲートポートにいる、魔法世界から旧世界と呼ばれる世界に移って来たのだ。

最初はこの時代にゲートポートなんてあるのか不安だったが、無事にゲートポートは見つかり旧世界に渡ることができた。

「何の問題も無く、旧世界にすることが出来たな」

『ゲートポートが無かったらこっちに来る手段が私たちには今の所ありませんので、あつて本当に良かったです』

俺は先ずこの世界の金を持っていないので、神から与えられた1000万ドクラマをこっちの金に両替できないかどうか聞いてみた所両替できるとのことだったので、必要最低限の分だけ両替をしてもらった。

明日には此処を発つつもりだったので、そこまで両替する必要はなかった。

「今日は疲れた、どこかに宿を借りて明日の朝にここをでるぞ」

『目的地はヨーロッパですか？』

「そっだ」

『彼女を助けるのですね？』

「誰のことか分からんな。それに欧州へ行くのはただの気まぐれだ」

あえてこう言ったが、実のところ今の言ったことは本音に近かった。

最初は生き残るために修行をすると言う目標があったから頑張れたが、修行が終わりいざ旅に出ようと思った時、俺はどうすれば良いか分からなくなったのだ。

そんな時、ふとエヴァの真祖の吸血鬼化の事を思い出し、行く当ても特に無いし少し見に行ってみるかと思ったのだ。だから、これは本当に唯の気まぐれに過ぎない。

原作を情報として脳に記憶し、知っているだけに原作に無理に関るうとも思わない、いや思えないんだ。

「俺はただ、気が赴くままに行くだけだ」

『そうですか』

ルカは俺の素っ気無い返しに短く答え、俺たちは暫し無言のまま早朝のまだスモッグが晴れないロンドンの街道を歩いていった……。こんなとき、無理に話しかけてこないルカの気遣いは正直助かる。

「ここにしよう」

しばらく歩き続け、一軒の古い宿屋の前で止まった。

『もう少しきれいな宿でも良かったのでは？』

「構わない」

明日に此処を出るので必要最低限の設備が整っている宿で充分だ
と思い、目に入った安そうな宿に泊まる事を決めた。

～翌朝～

陽が上りきる前に人目を避けるように宿を出ていき、港へと足を
運んだ。

俺は出来れば船で大陸を渡ろうと思い、近くの船にいた老人にヨ
ーロッパへ行く便が無いか聞いた。

「少し聴きたいんだが、ここからヨーロッパ行きの便は出ているか
？」

「うん？ お前さんこちら辺ではあまり見かけない顔じゃな。ヨー
ロッパ行きかい？ なら早朝にオランダ行きの便がでるはずだよ。
ほれ、ここからでも見えると思うがあの大きい船じゃよ」

「今からでも乗れるか？」

「さあね？そこまではワシも知らんよ。ただ、もし乗せてもらえなさそうじゃったら雇ってもらおうと言えば乗せてもらえるんじゃないかの。お前さん力仕事とかは？」

「大丈夫だ。邪魔したな、助かった」

「なに、それくらいお安い御用じゃよ。乗れるといいのう」

老人はそう言うのと再び作業へと戻っていった。

俺はそのまま老人が教えてくれた船へと足を進めた。

「すまないが今からでも乗船できるか？」

と船の前にいたいろいろと指示を出している、このリーダーらしきカール髭が立派なおっさんに話しかけた。

「ん、ああ大丈夫だと思うが……あんた金あるのかい？」

確かに見た目はボロいローブを纏った、いかにもお金が無い旅人のように見えるが……それにしても随分はつきり言うな。

「金ならある」

俺は目の前のカール髭が立派なおっさんに金の入った袋を投げ渡した。

「それで足りるか？」

「疑って悪かったな。これで充分足りるぜ」

「気にしていない」

そういうと俺は、さっさと船の中へと入っていった。

しばらく与えられた部屋で寝ていたが、部屋に誰かが近づいてくる気配を感じ取ったので目を覚ました。

「ルカ、一応警戒頼む」

『はい』

ルカに一言頼み、慌てず足音の主が来るのを静かに待った。

しばらくし、コツコツと音を立てていた足音は俺が寝ている扉の前で止み少しの間を置いてゆっくりと扉が開いていった。そこにいたのは――
ツ！？

「……何だ、あんたか。何か用か？」

「ガハハハハッ！！ 何だとはつれないな。おい。まあ頼みがあるんだが……」

今しがたこちらに近づいていた足音の正体は先程のカール髭のおっさんだった。後から聴いたがこのおっさん、ここの船の船長らしい。船長がこんなところに居ていいのだろうか？

まあ特に興味も無いので聞きはしないが……。

「頼み？」

「お前さん、料理は出来るか？」

「料理？ 何故だ？」

俺が何故？ と聞くとカール髭のおっさん……長いし髭船長でいいや……髭船長は気まずそうにゴツイ人差し指で頬をポリポリと掻きながらなにやら言い辛そうにしていた。

「どうしたんだ？」

「ああ……いやゝそのな、料理を担当しているものがどうやら船酔いになってしまったみたいで、な？」

「……はっ？」

思わず聞き返してしまった自分はおかしくなと思う。普通船酔いする者を雇ったりなどしないはずだからな。

「今日来たばかりの新人なんだが、面接の時に黙っといたらしくてな？ いやゝ面目ない」

無言で居たのをどう受け取ったかは知らないが、悪びれた風もなく謝っていた。

「なに、金は出すからここは俺に免じていっちょ頼まれてくれないか？」

「何故俺に頼むんだ？」

「頼めるのがお前さんしか居なくてなあ」

「……はあ、分かった。案内してもらおう」

「ああ料理とかできんかったら、皿洗いだけでもいいからな」

それでも料理には自信がある、アーチャーとセイバーにもお墨付きをもらっているしな。ギルが褒めてくれた時には驚いたな、あいつ随分と性格が丸くなっている気がする……。

そして、俺は髭船長に案内されながら船の調理場へと歩いていった。

～夜～

俺は今全ての仕事を終えて部屋で休んでいる。料理はどうしたって？ あああれなら、俺が作って全員の舌を納得させた。

髭船長からここの料理長をしないかと誘われたが、生憎するつもりもないので断らせてもらった。船は明日の昼にはオランダの漁港に着くらしい……着くのが早い気がするが特に困ることも無いので気にしないことにする。

「明日にはオランダか……どうやって北へ向かうか……」

『北へ行つてどうするんです?』

「吸血鬼伝説ってしっているか?」

『吸血鬼伝説ですか?』

「ああ。吸血鬼のモデルになったやつに会ってみようかな」

『モデルと言いますと……ヴラド ツェペシュ公爵のことですか?』

「確かこの時代には生まれているはずだけだな」

『モデルとなっているだけで、吸血鬼とは限りませんよ?』

「北欧には吸血鬼伝説が多いだろ?」

北欧にはそういった類の伝説が多い。吸血鬼や狼男とか。特にヴラド公爵のワラキアで謎の怪死が相次いだと歴史に残っているくらいだから、一目見ておきたかったな。もしかしたら、エヴァンジェリンのことについても公爵家なら何か聞けるかもしれない。

「エヴァンジェリンの事について何か聞けるかもしれない」

『マクダウエル家でしたか?』

「後は一度そのモデルとなったブラド公に会ってみたいのもあるけどな」

『串刺し公とも異名をとってますからね。まあツバキなら大丈夫で

しょうが』

「普通の人間なら、な。もし本当に吸血鬼、しかも真祖だったら苦戦はするだろうな。負ける気はないが」

『兎に角、まずは会って観なければ分からないですね』

「そうだな。俺はもう寝る、監視頼んだぞ」

『おやすみなさい、ツバキ』

俺はルカに一言言つとそのまま床についた。

～翌日の昼～

次の日の昼を少し過ぎたくらいに俺が乗った船はオランダの港へと着いた。

俺は一言別れを言いに髭船長のもとへ向かった。

「世話になったな」

「何、こっちも随分と助かったぜ。職に困ったらいつでもうちに来るといい、料理長のポジションはとっておいておくからな!」

「気が変わったらな」

俺がそう言うとその場を後にし一目がつかないところまで来ると、影で漆黒の馬を出してルーマニアまで一気に駆けていった……目指すはワラキアのヴラド公――

～夜～

今俺はワラキア領のヴラド公の屋敷に居る。会ってみて一目でこいつが人間じゃないと分かった。恐らくはヴァンパイア……吸血鬼だろう。犬歯が異様に長かったからな、それと若干ながら魔力を感じたから間違いは無いはず。にしても、すぐ分かるような特徴を隠

さないのは何故だ？吸血鬼に成り立てだからか？

最初は戦闘も覚悟していたんだが特にそうだった事は起きなかった。そして、なぜかヴラド公に気に入られていた——— 適当に相槌うつてただけなのに。

王の財宝から自家製のワインを持ち出して、早速マクダウエル的事について聞いてみた。結論からすると、マクダウエル家は相当の大貴族らしいことが分かった。それと、数々の武勲をあげているらしいことも。

マクダウエル家には今年10歳になる子供がいて、とても美しい美貌で将来有望な少女なのだそうだ。
明日の朝、誕生会が開かれるらしい。

間違はなくエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルのことだろう。因みにこのヴラド公も密かに狙っているらしい…… 大方年頃になったら自分の眷属にでもするつもりだろう。まあこんな奴が『闇の福音』とまで恐れられた彼女を従わせられるわけがないだろうが。

ここからブラド公は酒が回って気分が良くなったのか、いろいろと自慢話をし始めた。俺は限が無いと思いマクダウエル家の場所だけを聞いた。

またいつか訪ねると約束をし、俺は夜で見つかりにくいと判断し黒翼を出してヴラド公からきいたマクダウエル家がある方角に向けて飛び立った。

ノルウェー上空

「なあ、ルカ確かヴラドが言っていたマクダウェルの家はここらへんであっているよな？」

『おかしいですね……座標ではここのはずです』

「もうすこし探してみるか……」

十数分後俺たちは山頂に白い城が建っているのを見つけた。下ばつか探していても見つからない訳である。

「あんなところに在ったのか」

『山の上だとは思いませんでしたね』

「ああそうだな。急ごう、陽が明けてきている」

ワラキアから飛び立って結構時間経ったのか空が白み始めてきていた。まあ遅くまで飲んでいたつてのがあるんだが。

『おかしいですね……生体反応が感じられません』

「何？……ちつ、遅かったか。ルカー応見るだけ見ていこう」

『了解です』

俺たちが城の中庭らしきところに降り立ち中へと入っていった。

「不気味なくらい静かだな……」「ブニュッ」……ん？ 一体なん……」

歩いていると足に変な感触を感じたので、足下を見るとそこには半開きになっていた扉から血を流して倒れている人を発見した。どうやらこの死体の腕を踏んづけてしまったらしい。

「死体か……ここから地下へいけるようになってるな」

不思議と嫌悪感はなく、興味も無くなりその先にあった下へと続く階段を降りるために半開きになっていた扉を開けそのまま下へと降りていった。

キイイイガチャンッ

コッソ

コッソ

コッソ

コッソ

コッソ

俺は俺は階段を一段一段ゆっくりと慎重に降りていき、ついに一番下へとたどり着いた。そこには金属製の扉があった。またかよとうんざりしつつも鍵は掛かっていなかったたのでそのまま中へ入って

いった。

ギギイイイイイ……

「……目的の少女は発見できずか」

目に入ってきたのは、目と鼻を潰され腹が割かれて臓器を撒き散らかして絶命している男と首から血を流して死んでいる女が居た。

『惨い^{むじ}ですね』

「恐らくこいつが吸血鬼の真祖化を実行した犯人だろう。こいつだけ死体の損傷が激しいしな」

『まあこんなロリコンの最低の生物の底辺みたいな奴はこうなって当然ですしね』

何気にさらつと毒を吐くル力だった。そのまま俺たちは城の外へと出て行った。

「となると、エヴァンジェリンは此処をでた後か」

『恐らく先程の死体の状態からまだ遠くへは行っていないはずです』

「ならさっさと探しに行こう」

「此処を去る前に、あいつもまとめて焼き払おう。証拠隠滅も兼ねる」

『そうですね』

「終焉式『終焉ノ炎』！！」
しゅうえんのほのお

ゴアアアアア

城は瞬く間に黒い炎に包まれていった……俺はそれを見届けないままその場を去っていった。

その地域で後世までマクダウエル家の城を焼き払った、その謎の黒き炎についていろいろと伝奇が噂されるのはまた別のお話………。

・ ・ ・ ・ ・

ルカの探知を使ってもエヴァンジェリンを見つけることが出来なかった。

「見つからないか？」

『はい、どれも引つ掛りません。すみません、ツバキ』

「気にするな。おそらく考えられるのは河に流されたか、攫われたかのどちらかだろうな……俺としては後者の方は考えたくないな」

『私も同感です。一度魔法ギルドに行ってみるといのはどうですか?』

「魔法ギルドか」

『気は引けますが、真祖の吸血鬼になったのなら賞金が遅かれ早かれでるはずですよ。当然目撃情報なども自然とそこに集まるはずなので探しやすいはなるかと……』

確かにそういうのは気が引けるな。一刻も早く見つけ出したいのに賞金がでてから探すのでは遅すぎる、かといってそれ以外に言い案もなかった。

「ちっ…分かった。だが、情報が入り次第すぐに向かうぞ」

『もちろんです、ツバキ』

俺たちは旧世界の魔法ギルドがある場所へと向かった…。

「あ、場所ってどこだっけ……?」

『此処からだ、フランスのパリですよ』

「……すまん」

第四話〜旧世界へ！目指すはワラキアの地〜（後書き）

はい、ということでツバキ君、エヴァと遭遇できませんでした！！
あつ、二トロは投げないで！？

え〜と次回はちゃんとエヴァは出します、はい。

原作にはエヴァの生まれが詳しく載っていなかったたので、勝手に創作しちゃいました。

因みに時期的にブラド・ツエペシュ公爵という吸血鬼のモデルになった人物も存在していたので、なんとなく出してみちゃいました。
実は本当に吸血鬼だったという設定付きで（笑）

エヴァとの邂逅編は今回も含めて、計三話にするつもりです。

そして、未だにどう敵対させるか迷っています…。

もういつそのこと備兵にしてラカンとペア組ませて襲わせるか！？
ま、まあそこはなるようになるでしょう、多分…おそらく… m a
y b e ?

最後に誤字脱字や感想などがありましたら、どしどし送ってください！！！！

第五話　くツバキと幼女と人形と・・・（前編）く（前書き）

長らくお待ちせしまして、すみませんでした（汗）

講習やらなんやらがありまして……すみません、いいわけですね。
今回は結構長めです。

では、第五話どうぞ！！

第五話　くツバキと幼女と人形と・・・（前編）く

く
く
く
く
く
く
く

S I D E ― ツバキ

パリの魔法ギルドに来てから数年が経った。あれから、エヴァンジェリンに賞金がかけられるのにはたいして時間は掛からなかった。いや、むしろ早すぎるくらいだった。

おそらく、奴が真祖化したエヴァンジェリンに逃げられた時のためにすぐに捕まえられるよう、保険的な意味を込めて賞金が掛けられるようにしておいたのだろう……まあ最もその本人が死んでいるからその保険も奴にとっては無駄に終わったがな。しかし、奴が仕掛けたその保険のおかげで俺とル力が手がかりを探す手間が省けた。

だが、ギルドに入ってくる情報はどれも不確かで俺は情報を聞くたびに現地へ向かっていったがそれらしい痕跡は見つかっても彼女を見つけることは出来なかった。

・ ・ ・ ・ ・

「はあ、今回もハズレか……」ダンッダンダンッ

『（ツバキ、情報が途絶えないと言うことはそれイコール彼女の無事を知らせてくれているようなものなんですから。）』

「頭では理解している、つもりだ。けどな、「ひつ、ひいいい……」
たつたすけっ『パアン』……」……「……こうもハズレばつかだとさすが
にな？」

「くっ来るなアアア」ぐげえッ……！

バキッ ブチブチ、ブチンッブシャアアア

俺たちは今エヴァンジェリンこと『闇の福音』の目撃情報とおま
けで最近村に危害を加えている賊の退治をしているところだ。

俺のほかにも数人ギルドの奴がいる。真祖の吸血鬼を倒すのだから
最低限チームを組まなきゃいけないらしい……俺一人で充分なの
だがな、全くめんどくさい。

「な、なんなんだよお前はあっ……！　なんで、なんでこんなガキな
んかに……！」

「あ？　五月蠅いよ、お前……羽虫ごときが俺の前で息をするな」

ガッギリギリギリ……ゴキーンッ

俺は賊のリーダーらしき物の首を片手で押し折って黙らせた。

「おいおい……」

「俺、あいつと敵対しなくて良かったよ」

「それには同感よ。それにしても本当に子供とは思えないわ、あの手際のこととそうだけど雰囲気もなんとなく大人びているし……」

後ろで外野（今回一緒に仕事をする事になったメンバー）がごちゃごちゃ言っているが、今の俺の見た目は10歳前後のガキ同然の姿をしている。

一応偽装しておくに越したことは無いからな、ル力は説明するのが面倒なのでみんなの前では黙ってもらっている。まあ念話出来るからあんまり変わらないんだけどな。

因みにメンバーは俺を含めて全部で6人居る。最初は子供だ何だとうるさく言ってきたが、お話をちゃんとしたらちゃんと理解してくれた。物分りが良くて助かったよ。どうやって説得したかって？それはご想像にお任せするよ……フッフ

「次はアタリだと良いんだけどな。（じゃないといい加減暴走でもして、国一つ落としそうだな……）」

「（ツバキ落ち着いてください。最近冷静さが欠けてきてますよ？）」

□

ル力の言う通りだ、此処最近この姿になってからと言うものどうも冷静さが欠けている気がする。

沸点も低くなっている気がするし……。やはり、精神が肉体年齢に引っ張られているのか？

早くエヴァンジェリンを見つけなきゃな……。主に暴走抑止のためにも。

「（分かっている。こういう時は温かいお茶だな、特に玉露がいい。あれは落ち着く。）」

自分で言ってて温かいお茶とか、親父くさいな。

『（親父くさいですね。）』

「（…言っな。）」

ル力態わさといいやがったな……。

「あ、あのぉ依頼も終わったので、そ、そろそろギルドに戻ろうと思うんですけど」

なにやらメンバー4がびくびくしながら俺に話しかけてきた。そんなに怖がらなくても良いんだがな、高だか素手で首を押し折っただけじゃないか……『（年端も行かないような美しも凜々しい顔の少年が能面のような感情を消した顔で、大人の首を押し折るのがですか？）』……確かにシユールだ。

まあシユールだけじゃ無い気がするんだがやりすぎた感はあるので反省はしておこう、後悔はしないがな。だがルカ、美しも凜々しい顔ってなんだ！？

「——」コクッ

俺は、無言で頷いた。どうでも良いがこの無口キャラ意外にやりやすいな……。基本しゃべらなくて良いしね。

「じゃあ、ちゃっちゃと帰りますかね」

依頼の完遂を報告するために俺たちのパーティーはギルドへと向かった。

俺もギルドへ戻ろうとしたときにふと通りがかった2人の村人の会話が耳に入ってきた。

村人A「おいっ聞いたか？ この先の村で魔女を捕まえたらしい。今から火炙りにするらしいぞ」

村人B「マジかよ、それじゃあの噂は本当だったのか。なあ今から見に行かないか？」

村人A「おっそれいいね！ 今からなら丁度焼かれるところに間に合うだろ」

魔女、火炙り……。もうこの年代から魔女狩りが始まっているのか？ いや、それよりも今の話もしかしたら……。！！

「おい、今魔女がどうか言っていなかったか？」

村人A「ああなんだこのガキ？」

村人B「おい、そんなガキほっとしてさっさと行こっぜ」

「答えると言っている……」

俺はすこしだけ殺気を出した。

村人A「（ビクッ）…こ、この先にある村のはずれの森に魔女が住んでいるって噂が……」

ああ なるほどな、大体予想は付いた。それよりもだ……。

「その魔女の容姿は？」

村人B「き、金髪碧眼で病人のように真っ白の肌だって聞いた。あと他にも緑髪の血糊の付いた大きな包丁を持った小さい人形を連れて自分の家に近づいた者を引きずり込んで食べてしまっって……」

「（血糊の付いた包丁を持った緑の髪の小さい人形って……というか近づいた者を引きずり込んで食べるって……）」

「（……おそらく違う意味の“食べる”ですよ、きっと。）」

「（ルカ……最近性格変わってきてないか？）」

「（元からこうですよ？）」

「（……ま、まあ先ずは村の場所を聞か。）」

「それで、その村の場所はどっちだ？」

村人A「あ、あっちだ」

俺はメンバーにすこし用事ができたといって先に帰し、黒翼を出

してその魔女が居る村へと飛んでいった。

・ ・ ・ ・ ・

しばらく飛んで、不意に眼下にそこそこ規模が大きい村が見えてきた。すると村の中央辺りに人だかりが出来ていて、その中心に木製の十字架に磔はりつけにされた10歳前後の少女がいた。

見ると少女の手足は杭のようなもので刺されて固定されており、腐りかけているのかすでに腐食し始めているようだった。ほかにも大小様々な裂傷や打撲の痕があり、傷がないところを探す方が困難な位だった。

中でも酷いのは顔だった、元はきれいであったであろうその顔は原型が分からぬほどに腫れていた。しかし、それでも彼女は息をしていた。俺はすぐに彼女の元へ飛んで行き、十字架から引き離しグロリー・オフ・ゴッドぐに神の栄光を掛けた。

因みに、神の栄光とは神からもらった超回復魔法のことだ。

「大丈夫か？」

SIDE——out

SIDE——エヴァンジェリン

「大丈夫か？」

何者かが私の身体が抱かかえると同時にその様な声が聞こえた。

～閑話～

私が村から少し離れた森に住んでいるから大丈夫だと思い、ほんの少し長く滞在していた所為で大勢の村人から奇襲を受け捕らわれてしまった。

どうやら、最近魔女狩りが活発化してきたようでどこからかこの森に魔女が住んでいるという噂が流れていたようで、厄介だったのは一人一人の手に不死対策と思われる傷が塞がりにくい魔具を持っていたことだった。この時初めて数の暴力と言うものを実感した。

捕まった後私は気が狂うかと思うほどの拷問の数々を受け、丁度いま見せしめのために火炙りに掛けられるらしい。この時、私は自分の不死の身体を深く呪った。

不死ということは煮られようが焼かれようが死なないと言うことだ……しかし、反対にどれだけ痛い思いをしようが絶対に死ぬことが出来ないということでもある、気が狂えるのならば狂いたかった。私はどこかで生きることが諦め掛けていたのかもしれない、それほどまでに私の心は酷く消耗しきっていた。

そしてこれから火が点けられようとしたそんな時だった、突然私の身体が誰かに抱きかかえられる感覚がし近くで何かしゃべる声が聞こえたと思ったら突如私の傷ついた身体が回復したのだ、普通ここまで強力な回復魔法ならば何かしらの副作用があってもおかしく無いのに私の身体には特に異常は見受けられなかった。

（閑話休題）

・ ・ ・ ・ ・

「おい、貴様何故私のような者にこのようなことをする？」

私は、助けた上、強力な治癒魔法まで使うこいつに少しばかり興味をもった。

「一々助けるのに理由などいるのか？ 少なくとも俺には理由など

無い、助けたいから助けた……ただそれだけだ」

返ってきたのは私の予想外の答えだった。てっきり、助ける代わりに何かを要求されるかとも思っていたのだが返ってきたのは、ただ助けたいから助けたというなんとも身勝手な理由だった。しかし、今時このような人間もいるのだな。

くくくつ、益々興味が沸いてきたぞ。せいぜいこの私を勝手に助けたことを後悔するがいい。

「他にも聞きたいことがあるのだが？」

「質問は後で受け付ける。それまでこのままおとなしくしている」

むっ……まあ質問は後でも構わないだろう。しかし、このまま……だと？ 世間様で所謂“お姫様抱っこ”とか言うこの状態のまま終わるまで待てだ！？ ふざけるなっ！？ 私は真祖で高潔で高貴な吸血鬼の誇りある悪の魔法使いである私が、なぜ、このような、羞恥プレイも同然なことを受けなければならないのだ！？

ええい降ろせっ、いまっ、スグにつ、おろせええええ！！ うが
あー！！！！！！

S I D E — o u t

SIDE——ツバキ

先程から腕の中で幼女が顔を赤くさせたり蒼くさせたりしながらジタバタと暴れている。その所為でシリアスな場面もすっかり台無しになっているのだが……。

一体何がいけなかったんだ？俺はただ、終わるまで待つてると言っただけなのに。てか、暴れたりするから足やら腕やらが顔に当たって地味に痛い……「ゲシッ」——っ！？ 今足の指が地味に目に入りやがった！？いくら俺が不死でも眼球傷つけられるのは痛いっての！！ 一体どんな教育を受けてきたんだ？ いっぺん親の顔を見てみたいね。

あ、すっかり目の前のゴミの存在を忘れてた。一応潰す前に聞いておくとするかな……。ほら、もしかしたら嫌々したがっている人とかいるかもしれないでしょ？

因みに俺の電子操作能力で相手の心拍数とか測れるから嘘をついて分かるんだよね。この能力意外に便利なんで多用している。

「（ルカ、此処一帯に結界と探知阻害を掛けておいてくれ）少し聞きたいことがある、何故この子を火炙りに掛けようとした？」

『（やりすぎないで下さいよ？）』

「それはそいつが魔女だからに決まっているだろう！」

俺が問いかけると目の前に一人の体格の良い大男が出てきて答えた。

「お前がこの村の代表か？　この子が魔女だと言っのならちゃんと証拠があるんだろうな？」

「俺が此処の代表だ。証拠などなくともその容姿で一人暮らしやその病的なまでの白さの肌、なにより態度が全く子供らしく無い！何よりこいつが住んでいる辺りで行方不明者が続出しているんだ、誰が見たってこいつが怪しいのは一目瞭然だろう！！」

なにやら、偉そうにさも俺の言うことが全て真実だとも言っように言いやがる。てか、最後以外全部こいつの主観ばかりだろうが……まあ最後のは気になるが、要するにすこし他の人と違うからというのと　その行方不明事件が丁度この子が住んでいた付近で起こっていることから魔女と判断したらしい。

「それはお前の主張か？　それともこの村全員の総意なのか？」

俺が聞くと他の奴らも肯定の意味の肯きをした。ん？　2人ほど心拍数が乱れてるな……よし、この2人だけは一応残しておくか。

「ところで話は変わるんだが、行方不明者というのは全員10代の女8人のことか？」

「な、なんでそれをお前が知っているんだ！？」

「ってことは行方不明者はそいつらで合っているんだな？　何故知っているかってのはついさっきまでこの近くにある村に出没する賊どもの退治をしていたんだがそいつらの拠点に捕虜と思われる8人の女がみつかったんだよ。さて、疑いも晴れたことだしこれでこのよう」……少女が魔女ではないとわかっただろう？」

「おい、貴様今不愉快なことを言おうとしなかったか？」

「何も」

危うく少女と言いつつになつた。気をつけなければ——ロリコン扱いされたらたまらないからな。

「な、あ、おっお前何の権限があつてこんな事をするんだ!!」

「権限？ はっそんなもの無いな。俺はただ助けたいから助けた。付け加えるとするなら……これは——唯の気まぐれだ」

「な、ふざけるな!! 何が気まぐれで助けた、だ!! まさかお前、この魔女の仲間なんだな!? おい誰か奴を捕まえろ、あいつらまとめて火炙りにしてやる!!」

仲間じゃないんだけどな。おとなしくしておけば殺さない程度に済ませてやったのに……。

「……………燃え尽き、朽ち果てる終焉ノ炎」
しゅうえんのほのお

俺は終焉式を展開させ周りにいた先程の2人を除いて全て灰すら残さずに焼き払った。とりあえず邪魔者は消し去ったので、残した2人に話しかけた。

「おい……その2人、俺の質問に答えるときに拳動不審だっただろ。何故だ？」

俺が問うとおびえながらも少しずつ理由を話していった——

聞くと、この2人は夫婦で娘と一緒に裕福とは言えないながらも幸せに暮らしていたらしい。

魔女狩りというものに消極的でむしろ嫌悪していたみたいだ。しかし、2年前に自分の娘に魔女の疑いを掛けられて異端審問に掛けられた。この2人は抵抗したが逆につかまり自分たちまで拷問を受けたそうだ。

そして、何の抵抗らしい抵抗も出来ず娘はそのまま……。娘は最後まで自分が居なくなつた後のことを心配していたらしい。まあこの話を聞いたところで、特に何の感情も抱かないが……。今回つまつたこの幼女が自分の娘の幼い頃に似ていたらしい。

「つまり、助けたかったが、また拷問にあうのが怖くて結局言い出せなかったと……」

結論から言うといつらもさっきの奴らとあまり変わらない。言うだけなら思うだけなら誰だって出来る。

「まあもう聞くことは無い、だから……」

そこまで言うとその2人は抱き合つて腰が抜けたのか座り込んでガクガクと震えている。別にとつて食いやしないのに……。

「さつさと失せる」

俺がそう言い切ると、一瞬「は？」という顔をしたが意味を理解したのか這い蹲りながらも必死に逃げ始める。……なんか俺が弱いものイジメしているみたいだな。

「おい、ちょっと待て」

俺はすぐにその2人を呼び止めてさっき使った『神の栄光』を掛けた。後から分かったのだがこの回復魔法は肉体いがいに精神にも影響するようだ。まあ精神が死んでいても回復できるかどうかは分からないがな。試したこと無いし。

因みにその2人は急に立てるようになったことに驚いていたが、俺がしたのだと分かるとさっきとは変わり感謝して目の前から去っていった。因みに拷問で出来た傷も治っていたらしい。どうでもいいが、目の前で脱ぐのだけはやめて欲しかった……何をとは言わないが。

一段落したところで俺は抱えている少女に向き直った。いや、向直ったと言っるのはおかしいか？まあ顔を向けた。

「それで、俺に聞きたいことは？」

「は？」

「いや、まだ聞きたいことがある、とか言っていたらどう？」

「あ、ああ、そうだったな、貴様に聞きたいことがある。しかし、此処ではあれだしな、ひとまず私の家に来てくれないか？」

「別にそれは構わない。そういえば自己紹介はまだだったな、俺は“黒神ツバキ”だ。君は？」

「くくくつ、私か？ 私は……“エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル”だ！！ どうだ驚いたろう？」

「別に。とりあえず、よろしくな」

「おい、何だその反応は!! もつとこつ……なんかあるだろう! ? 私は、真祖の吸血鬼だぞ! ? お前も魔法使いなら“不死の魔法使い”とか聞いたことがあるだろう!!」
マカ・ノス
フェラトウ

「ん? ああ聞いたことがあるような気がするし、無いような気もする……というかどうでもいい」

「どうでもいいって……お前なあ! ? はあ……お前がかなり変わった奴だと言うことがよく分かったよ」

「それはどうも。それじゃその家まで案内してくれ」

「別に寝めてなどいないんだがな。家は……おい、それよりも先ず私を降ろせ」

「別にいいだろ? それで、家はどこなんだ?」

「私が良くない!! もつと違う運び方があるだろう! ? いいからおろせ!!」

「村のはずれとか言っていたから、そっちに向かえば見つかるか?」

俺はそついうと誰も見てないことを確かめて黒翼をだし、空へと飛び上がった。

その間抱えている幼女があゝだこゝだと五月蠅かったが俺は勤めて無視をしていた。うん、我慢していた俺、偉い。

そんなことがありながらも俺と幼女(?) は彼女が住む家へと向

かっ
てい
つた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「それで、貴様は一体何者なんだ？」

「何者と言われてもな。唯の備兵？」

「何故そこで疑問系なんだ？」

「じゃあ、備兵で」

「じゃあつてなんだ！？　じゃあつて！！」

ああとこ
ろで俺た
ちは今エ
ヴァの――エヴァンジェリンじゃ長い
のでそう
呼ばせて
もらって
いる――
家に来
ている。
見た目
が家じゃ
なくて
コテージ
みたいだ
と思っ
たのは
心のう
ちにし
まっ
ておこ
う。

「俺は魔法ギルドで備兵のようなものをしてるんだ。もっとも今日やめるんだがな」

「ほう、どうしてまた今日やめるんだ？」

「それはお前を見つけることが出来たからだ」

「なっ！？ やはり貴様私を利用する気だったのか！？」

途端にエヴァが臨戦態勢をとったので、俺は勤めて穏やかな口調で否定した。

「そうじゃない、友人からある男がマクダウエル家の娘を狙ってよからぬことをしようと企んでいると情報がいってな。確かめに行ったらすでに事が終わっていてな……」

「貴様、どこまで知っている？」

俺はその男がエヴァの親戚であることやその企みが真祖の吸血鬼を作り出す儀式だということ等俺が知っている事全てを話した。

「なるほどな。それで私を探していたというわけか。しかし、その友人とは誰だ？」

「お前も知っているかもしれないが、ヴラドだ。因みにあいつ、真正銘の真祖の吸血鬼だぞ」

「な、ヴラドってあのヴラド公のことか！？ しかも真祖だ！？」

「驚くことか？」

「驚くわ！！むしろ驚かない方が驚きだわ！！」

意外に良いツツコミになれるな、エヴァ……。

「噂どおりの奴かと思ってたけど、あいつ意外に良い性格してるのな？」

「そうか？ 私は、どうもあいつの事は好きになれる」

「そうか。所でなんで捕まったんだ？」

「ああ、恥ずかしい話だが、不覚にも人形の整備をしているときに奇襲に遭ってな……」

エヴァはそういうと苦虫を潰したような顔になった。よほど屈辱的だった様だ。

「そつえばえらく物騒な人形をつれてしていると聞いたな、何処にあるんだ？」

「ん？ それなら今はお前の後ろにいるじゃないか」

「は？」

俺はゆっくりと後ろを向くと………ッ！?!?

そこには、赤黒い染みが――血がついた包丁を持った人形がいた。………あ、あぶねえ、危うく年甲斐もなく叫ぶところだった……年甲斐もないっていうような外見はしてないけど中身、ウン百歳だからな？ まあそこは無口キャラで培った鉄面皮のおかげでぎりぎりで表情にはださなかったけどね。

「ケケケツ ヨウ、旦那が御主人ヲ助けテクレタノカ？ ツヨソウ

「ジャネエカ、イツチヨ斬リアオウゼ？」

「断る。エヴァ、何だこのふざけた殺人^{キリング・ドール}人形は？」

言いながらも俺は、内心かなりびびっていた。だって、後ろを振り返ったら目の前に、何の前触れもなく血が付いた包丁を持つてる生き人形がいるんだよ？　びびらない方がおかしいでしょ？

「そいつはチャチャゼロだ、私の従者をさせている。普通なら人間を従者にするのだろうが、私は人間が信用ならんなのでな、人形を従者にしようと考えたんだ」

まあ人間が信用できないのは分からないでも無いな。それでも、このホラー人形はやめてほしい、絶対トラウマ物だと思う。てか、こいつがチャチャゼロなのか？　知っている姿と違うな……。

「所で貴様は私に会ってどうするつもりだったんだ？」

「え？　あつ…　あゝ　「考えてなかったのか？」うつ……」

「ま、まあ安全は確認できたしな。その後のことは追々考えるとするさ」

「エヴァの方はどうするんだ？」

「そついう、貴様はどうするのだ？」

「質問を質問で返すなよ……。まあ俺はこの後、^{ムンドゥス・マジクス}魔法世界に行く予定だ」

「それでは、私はお前に付いていく。お前が言うその魔法世界というのも、まだ見たことが無いしな、退屈しのぎにはなるだろう」

「俺は別に構わないが、退屈しのぎになるかどうかは知らんぞ？」

「そこは退屈させないのがお前の仕事だろう？」

「ケケケツ オレハ強イ奴サエイレバ 何処デモカマワナイゼ 早く斬リアイテエゼ」

「呪い人形はともかく何でお前が偉そうにしてんだ？ それと、何時までも貴様と言わないでもらいたいな、俺にはツバキという名前があるんだ」

「ふん、誰が貴様を名前などと呼ぶか。言っておくが信頼はしているが、信用はしていない。エヴァと呼ばせているだけでも感謝して欲しいくらいだ。名前で呼ばせたいのなら、貴様が信用に値すると私に思わせてみる。まあ気が向いたら呼んでやってもやらないことは無いがな」

この頃からツンデレ化が進んでいたのか。恐るべし少女……。と
いうか、信用できないのなら普通は付いていくなんて言わない筈な
んだけどな？

「それで、何処からその魔法世界とやらに行けるのだ？」

「此処からなら、パリの外れにある遺跡から行けるな」

「遺跡だと？ 一般人に見つかったりしないのか？」

「一応は認識障害を掛けているみたいだが、それでも一般人が紛れ込むのは結構あるそうだよ。そういう時は記憶を消して別の安全な場所に放置するんだと」

「記憶を消すか……。はっ、どっちが悪者なんだか」

「己の善が相手によっては悪に成りうることもある。所詮、善か悪かなんてこの世に答えなど無い」

「ほう、ツバキの考えは私に通じるものがあるな。やはり、面白い」

「……信用に値すると思わせなきゃ、名前で呼ばないんじゃないかなかったのか？」

「気が変わった。私の考えがツバキの考えに似通っているしな、後はまあ……同じ考えを持つ者としての直感だ」

「直感が……まあいい、とりあえずは魔法世界へ行くためのゲートへ行こうか」

「今すぐに行くのか？」

「ああ何も言わずにギルドから出て行くしな。それに、ここがばれている可能性が高い、というかはばれているだろうな。早く此处から出て行くのに越したことは無い」

「ケケケッ ソンナモン、マトメテ斬り殺せバイダゲジャネエカヨ」

「出来なくも無いが、それだと余計に向こうに行きづらくなるぞ？」

警備も厳重になるだろうしな。それに、俺がエヴァたちと一緒にいるとばれたらややこしくなるだろう？」

「オアズケカヨ ツマンネーナ アア早く斬り合イテエゼ」

「阿呆か、チャチャゼロ！」

「エヴァは分かってくれたか」

「ちまちま殺していくのではなく、あいつらの拠点までいって最大呪文で一気に片付けるのが良いに決まっておるだろうー！」

「……」

訂正、このロリ吸血鬼も何も分かつちやいなかった……。仕方ないので、此处で鉄拳と言う説得を開始した。

ピンポンパンポーン♪

此处からは、暫くお見せできない内容となっております。お茶でも飲みながらしばらくお待ちください。

くヴィヴァルディ 四季より協奏曲第一番「春」く

・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・

ピンポンパンポーン」

大変長らくお待たせしました。

それでは、続きをお楽しみください。

酷い電波を受信した気がする……。

無視をしよう、なんとなく気にしてはいけない気がした。

「いいか、俺に付いていくのなら、俺が良いと言っまで絶対に騒ぎをおこすな？ いいか、絶対だぞ？ 絶対だからな？」

俺の目の前には最早芸術とも呼べる10段たんこぶを頭につけている、涙目のロリ吸血鬼ことエヴァがいた。その隣には、脚と腕を外された上に創造した特別製の糸でぐるぐる巻きにされて糞虫状態のチャチャゼロがいた。

「い、いきなり殴るなど酷いじゃないか!？」

「御主人ハマダイイゼ？ オレナンカ手足モガレタウエニ グルグルマキニサレテ身動キガトレネエンダゼ？」

「お前らが口で言っても黙りそうになかったからな？ 何か文句でもあるのか？」

「あるに決まっておるだろう!？」

「ふむ……まだ、足りんようだな？ もう一回してほしいのか？」

俺はそう言いながら、拳をゴキン、ゴキンと鳴らしながらゆっくり、ゆっくりとまるで獲物を捕らえようとする獣のように近づいていた。

「な！？ あ、いや、その、すすすすすまなかったから、それだけは止めてくれ！？」

今度は本気で泣きながら言ってきたので、止めておいた。うん、分かればよろしい。

「ケケケツ スツカリ旦那ノイイナリダナ ご主人 旦那モ最後ノセリフガ フリノ様ダツ……」

「なんだチャチャゼロ、もっとやって欲しいのか？ ん？」

「イ、イヤ サスガニコレイジョウハ遠慮シトクゼ」

「分かったのならそれでいい。それと持っていく荷物はここに集めておけ」

「いや、荷物と呼べるようなものはないぞ。あるとすればチャチャゼロくらいだ」

さっきまでマジ泣きしていたはずのエヴァが、何もなかったかの様にそう答えた。……切り替え早いな、おい。

「オイオイ ヒデネエナ オレハ荷物扱イカヨ？」

「エヴァ、チャチャゼロのことを物扱いするのは止めておけ。仮にも魂を込めたのだろう？　自分がつくった子供なんだ、大事にしろよ？」

「まあツバキがそういうのならそうしよう」

「素直じゃないな」

「御主人モマダ　子供ダナ、ケケケッ」

「誰が子供だ！！」

「いい加減にしろっての、そろそろ行くぞ」

「ああ」

「ケケケッ　　楽シミダナ」

……チャチャゼロの言う楽しみは不安しか沸かないのだが？
俺たちは魔法世界へ行くため、パリへと向かった。

『ぐすっ、私なんて、どうせいない子ですよ……』

あっ……！？

第五話　くツバキと少女と人形と・・・（前編）く（後書き）

吸血鬼になって数年ではまだチャチャゼロはいないはずですが、あえて今回はすでにチャチャゼロはいたと言うことにしてみました！！　でも、まだ人形使いと呼ばれるほどにはなっておりません。しかし、チャチャゼロはまだ原作のようなボディではないです。これから、魔改造されていく、みたいな感じです。

一応次回でエヴァ邂逅篇は終わりにしようと思います。終わったから終わったで、一気に時間が加速します。

最後に感想、誤字脱字・誤表現などがありましたら、どしどし送ってください。

第六話　ツバキと少女と人形と・・・（後編）　（前書き）

今回でエヴァ邂逅編は終わり、です。

では、第六話どうぞ！！

第六話　ツバキと少女と人形と・・・（後編）

）
）
）
）
）
）

S I D E — ツバキ

はい、というわけでやってきました、魔法世界！

エヴァはばれなかったのかって？ それについては、無問題だ。何しろ警備が薄い薄い、まあ念のために能力で認識されないように妨害電波を出していたし、見つかる心配はなかったから堂々と正面から行ったさ。

それよりも、紹介し忘れていたルカを紹介する時のほうが遥かに大変だった……。まあ、俺の使い魔と言うことで一応納得してもらったが。

そして、俺たちは今、南にある中立国のアリアドネーに向かってる。此処なら下手に襲われる心配も無いだろう。噂では、例えば犯罪者でも学ぶ気があるのなら拒まれないそうだ。こっちにとつてしてみれば、エヴァの良い隠れ蓑になるしな。

「ツバキ、中立国などに行つてどうするのだ？」

「ああ、あそこなら犯罪者でも学ぶ気があるなら受け入れるところだつて聞いたからな。それに、どうせだったら何か新しい術式でも考えようかとね。それに自分の能力の応用もしてみたいし」

「ケケケツ ツバキノ旦那八充分ツエエンジャネエノ力？」

「用心に越したことは無いさ。慢心は身を滅ぼすからな」

どこぞの英雄王の様に、とは言わなかった。

「くつくくつ、確かにそうかもしれんが、慢心は強者の特権だぞ？」

「俺は臆病なんだよ」

ニヤリ、と意地の悪い笑をするエヴァの問いに即答した。だって、痛い嫌じゃん？

まあそれは兎も角、本音のところはこの先に起こるであろう大戦に備えるためだ。黒幕である完全なる世界の親玉である、造物主コスモエンテレケイアの存在が一番大きい。ライフメイカー

あいつの使う術は反則級チートだからな。原作を見たところなんのリスクもなしに使ってたつばいからな、俺ですら勝てるかどうか……死なないとは言えど、消されたら意味が無いからな。

あいつを倒すにはそれこそ、単騎で世界の1つや2つ破壊できるようなチートじゃないと倒せない気がするし……考えたら、倒せない気がしてきた。

まあ要は、持てる切り札は多い方が良いつてことだ。ということで学者の街と言われるアリアドネーに行っているいろと研究をしようと思った。

「全く、これ以上強くなってどうしようと言うのだ……」

「旧世界の日本という国に“備えあれば憂いなし”と言う諺がある。準備をしておけば何事も心配が無い、と言う意味だ」

「ほう…その諺とやらは面白いな。いつかその日本とやらに行ってみたいな」

あれ、日本フラグだった？ まさか俺の何気ない一言が日本趣味へのさきがけになるとは…もしかしたら、諺オタクになったりして…。

偉そうに無い胸を張りながら諺を言うエヴァ……うん、無いな。全然思い浮かばねえ。

「そうだ、エヴァ。アリアドネーにいったらまずは治療魔法を覚える」

「む、何故だ？ 私は不死だぞ、そんなものは必要ないだろう？」

「対不死の武器を使われた時どうするんだ？ 念のためだ、覚えておけ」

「なら治療魔法を覚える代わりにル力を調べさせてくれるのなら、覚えてやらんことも無いぞ？」

「ケケケ 御主人モ素直ジャネエナ」

「五月蠅いぞチャチャゼロ！」

うゝむ、そう来たか……仕様が無いな、ル力には犠牲にもらおう。

「それなら交渉成立だな」

『ちよつ、ツバキ！？ 久々の出番だと思ったら扱い酷くないですか！？』

「ルカ、これはルカにしか頼めないことなんだ……それに、もしかしたら出番が増えるかもよ？（ボソツ）」

『ツバキ……私、頑張ります！！』

よし、これで万事解決だな。

「ツバキ、お前意外と容赦ないな」

あれ？ 聞こえてたのか？

「仕方がなかったんだ、必要な犠牲だったんだ……」

俺は、悲痛そうな顔をしながらそう言った。

「ケケケ 愛サレテンナ？」

おい、チャチャゼロよ、何故疑問系なんだ？

「まあそれは良いとして、もうすぐアリアドネーに着くぞ」

まあ、喋りながらも高速で飛んでいたからな。それでも、人目は避けていたけどね。

「もう着いたのか？ 意外と早かったな」

「人目を避けながらもこんだけスピードを出していたら、すぐに着くさ。それより、そろそろフードをつけておけ」

「別に、ばれたらその時は…」

「ダメだ、余計な手間を自ら増やすことも無いだろう?」

「はぁ……相変わらずだな、ツバキがそういうのならそうしよう。しかし、お前は冷酷になったと思えば甘くなったり、一体どっちなのかはつきりしたらどうだ?」

賞金稼ぎを撃退する時のことを言っているのか?

「俺は出来るだけ面倒は避けたいんだよ。無論必要なこと以外はしない、余計なことをして面倒が増えても困るからな。まあ顔を見られたりしたら、例外なく消すけどな」

「ははっ、面倒だから、か。実にお前らしいな」

「ダナ 旦那ラシイナ」

「お前ら、まるで俺が面倒くさがりみたいな言い方じゃがって」

「なに、本当の事だろう?」

何気に反論できないのがムカつく……。

「……さっさと行くぞ」

せめてもの反抗で一氣にスピードを上げてエヴァたちを引き離していった。

「お、おい、待てツバキ!!」

「旦那モ子供ダナ」

チャチャゼロよ、後でバラすぞ？

俺たちはアリアドネーの門の前までやってきた。一応設定としては歳の離れた兄妹けいまいという事で通しておいた。因みに今の姿は180cmくらいで大体18歳に見えるようにしている。

「それでは、ようこそアリアドネーへ。あ、それと研究結果は逐一報告して頂きますようお願いします」

と受付の女性が言っていた。まあ、誰も無償タダで勉強や研究できるとは思っていなかったしな。これくらいなら、まだ許容範囲だろう。この世界の魔法概念と違う研究成果などは報告はしないけどな。パワーバランスとかその他色々崩れそうだし、なにより目立ちたくない、ってのがあるしな。

ともあれ、これで帝国や連合は手を出しづらくなったし、暫くは落ち着いて研究に集中できるな。

「ああそうだ、エヴァ」

「ん、何だ？」

「お前、俺とは別に寮で暮らす事になるから」

「は？ …………… はああああああ！？」

「………… エヴァ、耳元で大声を出すのはいけないと思うんだが？」

正直そのくらいじゃなんと無いが、吃驚^{びっくり}するだろう？

「突然、変なことを言うお前が悪いんだ！！ っていうか何故私だけ寮に暮らさねばならんだ！！」

『エヴァの言う通りですよ？ しかし、ツバキGJです！！』

「ルカもエヴァも、落ち着くんだ。さつき受付でな治療魔法を習得するには何処で学べば良い？ と聞いたんだ。そしたら、寮制の治療専門の名門校があるって聞いてな、そこにお前を入れさせてもらう事にしたんだよ。良かったな、エヴァ」

俺は得上のスマイルと共にサムズアップをしながら、エヴァに言った。

条件で、代わりに俺が研究している事を逐一報告しなければならなくなつたがな。まあさほど気にする程度でもないだろう。短い間とはいえ友達が出来るかもしれんしな。

そしてルカよ、その“GJ”は何処で仕入れやがったんだ……？

「………… おお………… は」

ん？ なにやらエヴァがプルプル震えている。正直小動物みたいで可愛いが、ぶつぶつ言っているのが若干不気味だ。

「どうし、「おゝまゝえゝとゝいゝうゝ、奴はあああああ！！」……うおー！？」

「お、おい、エヴァ？ 何故そんなに怒っているんだ？」

「何故……怒っているのか、だと？ ふ、ふふ……ふふフフフフ」

「あゝエヴァ？」

「貴様は何でもかんでも、一人で勝手に決めすぎなんだよ！！ なんだ？ そんなに私が信用がないのか！？」

「別に何か減るもんでもないし、良いだろう？ それと、エヴァのことは信用も信頼もしている」

「五月蠅い、黙れ、息するな！！ 凍てつく氷柩！！」

標語みたいだな。てか、最後の部分は俺に死ねと？ まあ俺には特殊な趣味など持ち合わせてなどいないし、このまま氷漬けにされるのもごめんだな。それに、人の話を聞いちゃいない。

と、言っている間に脚がもう氷漬けにされているよ……。しかない、“分解”するか。

思った瞬間に、バチバチイ！！ とすでに身体の半分まで凍った体に黒紫色の電気が走り、氷を文字通り“分解”していった。まあ、ぶっちゃけ“電気分解”だな。しかし、これ本当に使い勝手が良い。

「ず、ずるいぞツバキ！！ この、チートではないか！！！」

「チートではないさ、バグは認めるがな？」

「ち、チートもバグも変わらんだろう！……！」

『では略して、チートバグですね』

ルカよ、お前は本当にどうしたんだ？

そして、エヴァ。本当の反則^{チート}というのは造物主みたいな奴のことをいうんだぞ？ まあその事をエヴァには言わないがな。

因みになんで魔法の電気分解が可能かと言うと、魔法も電気分解できないかと思ひ俺の電子操作能力に魔力を込めてみたら見事、魔法自体を“電気分解”することに成功したのだ。

魔力も分解可能で魔法によって発現した物質等も分解可能だった。因みに人間も分解可能だった……なんで人間でも可能と知っているかはご想像に任せよう。

しかし、本当何で魔法を分解するために俺の能力に魔力を混ぜてみようと思ったのかわからない。

まあ兎に角成功したんだし、結果オーライだろう。ぶっちゃけ一々考えるのめんどくさい。え？ そんな奴が研究とかできるのか、だって？ ……さっきのは聞き流せ。じゃなきゃお前の頭を電気分解させてやる。

若干ゴタゴタ？ はあつたが俺たちはアリアドネーへと入国した。チャチャゼロはどうしたって？ あいつなら五月蠅いから、さつき^{ゲート・オブ・パレロン}王の財宝にちゃんと“収納”しておいたぞ？ あいつなら息が出来なくても平気だしな。まあ魔力が供給されなくなるから、動けなくはなるけどね？

・ ・ ・ ・ ・

そして、50年の歳月がすぎた。え、時間飛び過ぎだつて？ い
いじゃない、細かい事気にしていたら早死にするぞ？ いや、本当
かどうかは知らんがな？

それに、特に書く事もなかったし。ああ、そういえばエヴァが1
00キロ箒ラレーに参加させられそうになっていたな。

一応、アリアドネーの名物らしい——何故“一応”なの
かと言うと、女の子が脱がされるからだ。一瞬「は？」と思っ
たかもしれないが、別に嘘を言っているわけではない。全て本当の
ことなのだ。

なぜか知らんが参加する生徒の殆どが妨害として武装解除呪文し
か使ってこないのだ。もつと他にも使えるものがあるだろう、とも
思わないでもないが、別に俺には関係が無いことなのであえて言わ
ない。別に、惚れてもいない女の裸なんぞ見ても欲情しないしな。

あ、そうそう蛇足と言つては何だが、あれから色々と研究でいろ
いろと成果を挙げていたらいつの間にか教授扱いになっていた。
エヴァもまだ治療魔法は苦手みたいではあるが、扱えなくもない
という程度までにはなっている。魔法薬に関しては、文句の付け所

が無いほどなんだがな。時々俺でも吃驚するような結果を出すから、エヴァは元々研究者に向いていたのだろう。

あれ、意外と書く事あったか？ まあいいや、面倒くさいし。

ところで今、俺は誰にも知られないよう、密かに研究してきた実験を自分に与えられた研究室で始めようとしていた。ぶっちゃけ新しい魔法開発だ。生や聖、希望といった、陽を持つ光属性と死や悪、絶望といった、陰をもつ闇属性を術式統合させるといったものだ。俺が作り出すは混沌の魔法、生や死、義や悪、希望と絶望、創造と破壊、再生と消滅、陽と陰といった相反する魔法。成功したら、俺の最強の切り札になるだろう。

俺は失敗が無いように完璧に準備を整えた事を確認すると、呪文を唱え始めた。

「契約に従いし終焉しゆうえんと開闢かいびやくの混沌あいはんの神よ
相反する理をもつて 全てを無に返せ

我は無にして有也 我は不変にして可変也

故に我は何者でも在り 何者でも在らず

現いま此処に 混沌もたらを齎いたせ給へ

混沌の神災！！」

よし、後はこのまま「よう、久しぶりだな」：なっ！？

詠唱が終了し、ここまで至って何の問題も起きず、後は集中力を切らさなければ特に失敗は無いだろうと思っていたときに、そいつは来た……。余りにも予想外な声が聞こえたので、集中力が途切れてしまった。そして、それがいけなかった、途中で集中力を切らした所為で呪文が中途半端に終わり、結果暴走してしまったのである。

ギョオオオオオオ

「あ、悪い。邪魔したみたいだね……ここは、戦略的撤退」

あ、あいつ逃げやがったな……。くそ、今度あつたら——会える
か分からんが——ぶ・ち・の・め・す！！ てか、何のために今頃
きやがったんだ！？

ギョオオオオオ

ってやばい、やばい！ そんな事言ってる場合じゃなかった！！
やばい、どうする？ ……この魔力量じゃ今から逃げたとしても
間に合わないだろう、第一に此処にはエヴァがいる。

ちつ、しかたない……一か八か賭けてみるか。

勝手に消えたらエヴァに怒られ……怒られるな、多分。

「ルカ、頼みがある」

ギョオオオオオ

『お前だけでも逃げろ、なんて聞きませんよ？』

はははっ……お見通しか。仕様が無いな、これはてこでも聞かな
いみたいだ。本当に良い相棒を持ったもんだな、俺も。

ギョオオオオオ ギュルルルルルル

「せめてメッセージくらい残しておきたいしな。エヴァにこのアク
セサリを送っておくか……」

俺は懷から出したアクセサリーをエヴァの元へ転移させた。今回の実験で失敗し、いざと言うときのために用意しておいたものだ。途中までは良かったのにな……いかん、また殺意が沸いてきた。

このアクセはメッセージを記録しておくだけでなく、さまざまな防衛機能を持たせている。古龍種のプレスすら無傷で耐えられる防壁等々だ。

ジュウウウウ キュイイイイン

「さてと、そろそろ……だな。ルカ、早計かもしれんが……こんな俺の相棒で居てくれてありがとうな」

『マスターの為ならば何処へでも』

「ははっ……全く、出来た相棒だ。さて、と……魔眼発動、永遠式および終焉式同時展開」

俺は外へ影響を及ぼさないように、魔眼“存在否定”と永遠式、終焉式を同時に全力で発動した。因みに暴走した魔法にも存在否定や永遠式、終焉式を使ってみたが、あまり効果がなかった。

効かないとか……あれか？ 存在する事実と存在しない事実のどっちもあって、なおか尚且つその境界がいまいだからか？

「ぐっ……あ……っ!？」

『ツバキっ!？』

「だ、大丈夫だ。心配ない……」

本当は全然大丈夫ではなかった。今でも形容しがたい激痛が体中を襲っていた。しかし、此处で止めるわけにもいかず無理に一つ一つでも強力な能力を3つも同時に発動した所為か体中が悲鳴をあげ、目からは血涙けっるいが流れていた。

だが、暫くすると、3つの能力を同時展開するのはさすがに無理があつたらしく意識が朦朧としてきた。

や、やばい……いし……きが……

『ツバキっ！？　しっかりしてください！！』

「す、すまない……ル、カ、俺……の……ぜ、ん魔力、で……魔力の、膜を……俺の周りに」

俺は耐え切れなくなり残りのルカに俺の残りの全魔力を使って、俺と暴走中の術式を膜状に覆い、衝撃を外へもらさないように頼んだ。直後の目が眩むほどの閃光と爆音と共に意識を手放した。その時、あいつの声が沈む意識の中、聞こえたような気がした。

「やっぱ、心配になって戻ってきてみたよって、あれ？」

『戻ってくるのが遅すぎです！』

「まあまあ、そう怒らないでって。まあ今はこいつを非難させるのが先決でしょ」

『非難させるって、どこにですか！？』

「くくくつ、秘密だ。丁度お前たちに用もあつたしな……まあ兎に角そのままじつとしてろ、拒否権は無い」

そういうと、そいつとツバキ達は姿を消した。

キュイイイイ………キュガッ！！！！

音が止み、静寂が訪れるとツバキ達がいた今まで居た部屋はまるで、何事も無かったかのように元通りだった。いや、正確にはツバキ達を除いて全く被害が無かった。

その頃、とある学生寮の一室で一人の少女が一つの黒く鈍く光る十字架を模したアクセサリを持ったまま呆然と立っていた。

第六話　ツバキと少女と人形と・・・（後編）　（後書き）

次回からは今回よりも、ものすんごい時間が吹っ飛びます、ええ。

できれば、グレートブリッジ奪還作戦までは書きたいなあ。

第七話　突撃！　地上の晩御飯！？　（前書き）

遅くなってしまうって大変申し訳ありません（汗）

第七話　突撃！　地上の晩御飯！？

）
）
）
）
）
）
）

S I D E - エヴァンジェリン

・ ・ ・ ・ ・

どれくらいの間そうしていたのだろうか……。
ふと、気がつき手元のアクセサリーから、机の上に立て掛けてある目覚まし時計の方へ視線を移すと、まだ数分間しか経っていないかった。そのことに、若干驚きつつも先程聞いたツバキからのメッセージが頭の中でこだましていた。

心が痛い

何故？

今の私の心の中は “何故？” “どうして？” “心が痛い”
という言葉で埋め尽くされていた。

それは私がバケモノになってから初めて心を許した者が彼だから
なのだろうか、それとも私は彼の事を……とにかく、私は今聴いた
ことを信じたくはなかった。

ツバキについていればこのような事は起きなかったかもしれない、
何かいつもと違い不自然な所がないか気をつけていれば回避できた
かもしれない……など止め処もなく延々と自問自答を繰り返す。だ
が、今更起きてしまった事は変えられない。いくらあの時こうだっ
たら、もしも、ああしていたらと思っただとしても所詮それはIFの
話だ。しかし、頭では理解できていても心がそれを認めないと
拒んでいた。

私はじっとしていられず、震える瞳から零れ落ちようとする滴を
堪えながらチャチャゼロを片手に部屋を飛び出し、ツバキが居るで
あろう研究室へと向かった。途中ツバキからのメッセージを思い出
しながら……。

・ ・ ・ ・

・ ・ ・

「エヴァンジェリンへ」

このメッセージをエヴァが見ていると言う事は、恐らく俺は実験に失敗した……ということだろう。もしかしたら、俺はこの世からいなくなっているかもしれない。何故かを話す前に、先ずは何故新たに魔法を造ろうとしたのかを話しておく――

――それは、俺宛てに「何かつまらないので、新技作らないと女装させるよ」等という変態極まりない且つ悪魔のような、おぞましいメッセージが録音された手紙が送られてきた事から始まる。俺は、何故か破壊できないその手紙を、嚴重に何重にも封印を施したのだが、それ以来開けてもいないのに録音された音声が流れるてくるように……しかも、決まって寝ている時に。そして、聞かされているうちに何故かやらなければならぬ気がするようになってきたんだ――

そんな事があり、俺は9割のトラウマと1割の義務感で『混沌の神災』という新たな魔法を完成させる事にした。しかし、一つだけ不安要素が残った。それはこの魔法が対象を選べず、発動者自身も含まれてしまうと言う事だ。

極限に集中すれば制御する事が可能なんだが、戦場で突っ立ったまま無防備に集中などしたら愚の骨頂すぎる……明らかに戦闘向き

ではない。まあそこは追々修正していけば良いだけなのだが。

実験は成功すると思う。絶対とは言えないが、予想外のアクシデントで失敗するかもしれない。できれば起こって欲しくは無いが…。

次にそのアクセサリーの事だがメッセージ機能のほかに防衛機能もつけてある。首からかけておけば常時障壁が展開される。まあエヴァには必要ないかもしれないけどな。他にも色々機能はあるがオート機能だから別に使い方とが必要ない。突然の奇襲や夜襲にも対応している。一応、竜の群れの中で寝ていても無傷で居られるくらいといっておこうか。若干機能不足も否めないが、そこは我慢してくれ。

最後になるが……もし……もしも、俺が死んだ時はその十字のネックレスに付いている宝石が、白銀から黒へと変色するようになっている。消えていたとしたら……いや、ネガティブになるのはよそう。

それから、エヴァに今まで内緒にしていたすまなかった。だけど、エヴァ……これだけは言える。死なない限り俺は再びエヴァの元へ戻ってくる“必ず”だ、約束する。

P.S.

変な人についていつちゃだめだぞ？ 赤毛の残念なイケメンとか、もつとだめだからな？

ツバキ・クロガミより

・ ・ ・ ・ ・

つまり、これが送られてきたという事は予想外のアクシデントが起きたということだ。追伸のことについては、今はスルーするとして……今は。そして、十字のネックレスが黒に変色しているということは——いや、認めるのはまだ早い。

「はあ はあ はあはあ
」

普通なら息が切れるなどありえないのだが、これから確かめに行く事への不安と動揺から息が上がっていた。

そして、ツバキが居るであろう部屋の前まで来るとドアの取っ手を持った。緊張から手が震えるがそこは、ぐっとこらえドアを開けた——。

キイイイイ、ボタンッ

目に入っただのは特におかしなところもない何処にでもある普通の部屋だった。しかし、様々なものが整理整頓されていて清潔な印象を受ける。すると突然今まで沈黙していたチャチャゼロが声を上げた。

「御主人」

「ああ」

チャチャゼロが声を上げた理由は分かっていた。ちょうど真ん中の開けた場所にわずかだがツバキの魔力が感じられた。ある境界を境にツバキの魔力がぶつかりと切れているのも確認できる。

「転移力ナンカ力？ 御主人」

「いや……転移という感じは、しない」

「ソレジャア、旦那ハ忽然トココカラ居ナクナッタツテ事力？」

「解せないが、そういうことになるな」

「ケケケッ マルデ神隠シミテエダナ」

「神隠し、か。もしも本当に神とやらが隠しているのなら、殺しても奪い返してやる……それから、ツバキの言うバカとやらも」

そう言って、歴戦の猛者すら腰を抜かすほどの殺気を放つ。

あながちチャチャゼロの言い分が間違っていないだけに本当に神とやらを殺してしまいそうではあるが。

↓ 数十分後 ↓

「手掛カリハ、ナシカ……」

チャチャゼロは主人のエヴァの顔色を覗^{うかが}いながらも、はっきりと言った。

「ツバキ…… 本当に何処へ行ってしまったのだ」

そういう、今のエヴァの顔は歳相応の顔をしていた。

微かにツバキの魔力が残る場所で、うずくまるエヴァは、まるで迷子のはぐれた親を探すように見えた。

「…… 旦那、早く戻ッテキテクレヤ」

チャチャゼロもいつものふざけた態度ではなく、従者として、一人の相棒として、エヴァを心配していた。

・ ・ ・ ・ ・

「チャチャゼロ、すぐに此処を発つぞ」

しばらくして、おもむろにエヴァは立ち上がり、チャチャゼロに言った。

「旦那ヲ探シニ行クノ力？」

「ああ、見つけ出して、あの馬鹿者を張り倒してやる」

「ケケケツ イツモノ御主人ニ戻ッタジャネエ力」

「何を言っている。私はさっきからいつも通りだ」

「それに、チートバグのアイツだぞ？ 逆に死んだと考える方が難しいだろう？」

「確力ニ旦那ナラ アリエソウダナ」

「そうだろう？ フフフツさっそく希望が視えてきたじゃないか」

「ケケケツ ソウダナ ソンジャサツサト探シニ行コウジャネエ力。オレモアイツニ八言イタイ事ガアルシナ ケケケツ」

「ならば、ここに居る必要はもうない。さっさとここを出る準備をするぞ、チャチャゼロ」

そう言つと、エヴァとチャチャゼロはツバキの部屋を出て行つた。そして、同日エヴァとチャチャゼロはアリアドネーを去って行つた。

・ ・ ・ ・ ・

S I D E - ツバキ

ポタ、ポタ、ポタポタ・・・

何かが頬を伝っていくのを感じ、俺は意識を取り戻した。だが、まだ視界がぼやけている。

これは、何だ？ 冷たくも無ければ、熱くも無い……温^{ぬる}い、水？

『ツバキ、お願いですから 目を覚ましてください……』

目を覚ます？ 何を言っているんだ？ いや、ちょっとまで、俺は……いったい何をしていたんだ？

その時、上から落ちてきた温水が頬から口へ伝わった。

何だ、しょっぱい？ ……ということは海水？ いや違うな。だとするなら、これは……涙、なのか？ 誰が泣いている？ どうして、泣いている？

「い、い かげん…泣き、止め…ろ」

喉が渴いていた所為か、思いの外上手く言葉を発することができなかった。その事に、少し違和感を覚えたものの顔には出さなかった。

『ッ！？ ツバキ！？ 目を覚ましたのですか！？』

あれ、この声なんか聞いたことが……ってルカの声じゃないか。俺の指につけていたはずなのにどうして、こんなにも耳元で聞こえるんだ？

そう思いながら俺は、ゆっくりとまぶたを開けていった――

「……あんた誰だ？」

いや、目覚めた時の第一声がそれなのはどうかと思うが、最初に入ったのは自分を心配してくれて泣いていたらしい、目を赤く腫らしている見知らぬ女性だった……そう“見知らぬ女性”だったのだ。

先ほどの第一声は別に悪くないと思うんだ。むしろ当然の反応だったと思う、異論は認めない。

見た目はそれこそ「絶世の〴〵」とつけても過言では無いような美貌を持った女性だった。側はたから見れば、そんな美女に膝枕をされていたのはおいしいシチュエーションなのだろうが、この状況でうれしい等と思うより、誰なのが気になってしょうがない。

ツバキは乗せられている方なのに、そろそろどいてくれないかなどと失礼な事を思っていたりする。

しばらくして、喉の調子も元に戻り普通に話せるようになったのを確認し、再度誰なのか聞いた。

「もう一度聞ぐが、あんたは誰なんだ？ どうして、ルカの……俺の相棒の声で喋っている？」

『はい？』

目を真つ赤に腫らした女性に膝枕される無表情の男、というなんともシニールな……正直シリアスの欠片もないのだが、言葉だけとは思いい口調はなるべく真剣にシリアスに聞こえるように努めた。

『何を……言っているのですか、ツバキ。私は貴方の相棒なのですから、私の声で喋るのは当然でしょう？』

「いや、ルカは女性人格ではあるが貴女のような完全な人間じゃない。それに、仮にも貴女みたいな綺麗な女性を一度でも見たら忘れるはずが無いだろう？」

なんか口説いているようにも聞こえなくも無いが、自分の所為で泣かせたみたいだし……気障な言い方だけど、まあこれで良いだろう。しかし、本当に誰だか分からない。ルカがなれるのは指輪型と双銃型にしかねなかったはずだ。可能性として、3rdモードが解除されたとも考えられなくも無いが、それにしても、余りにも人間染みている。

「くくく、そいつは間違いなくお前の相棒だぞ？」

俺の後ろからそんな声が聞こえてきた。そして、俺はその声を知っていた。なぜなら、その声の持ち主は俺が転生する事になった元凶だったからだ。そいつは――

「カグラ……か」

「ん？ つれないねえ、反応薄いねえ……もしかして、まだ寝ぼけているのかい？」

「寝ぼけてなどいない。それで？ 俺は何故此処にいる？」

「此処、とは？」

「惚けるな、何故俺がお前と初めて会った処にいるのか聞いているんだ」

「ほう……。よく此処が、俺とお前が初めて会った場所だと解ったな？」

「愚問だな。あんな事をされて此処を忘れる等と言う方が無理だ」

「くくく、それもそうか。まあ此処が何なのかが解っているなら早い、さつさと話を進められそうだな」

「此処にいるって事は、俺は死んだという事だろう？ 俺はさつきまで自分の部屋にいたはずだが周りに被害は出ていないのか？」

「ふむ。一つ目の問いに答えるなら、正確にはお前はまだ死んではない。だが、瀕死の状態ではあるがな。二つ目の問いに関しては、お前が失敗した術式に取り込まれて暴発する前に俺が術式ごとお前等を此処につれてきたって訳だ、だから被害はないぞお前以外にはな。……にしても、お優しいねえ、自分よりも周りの心配かあ？」

「誰の所為で失敗したと思っているんだ」

「ハハハ、それに関してはすまなかったって。まああのままだったら魂まで消滅してたから、相子ってことで？」

「納得できないが……あの程度で集中力を乱すって事は俺もまだまだだったと思えば、まだ納得しようがあるな」

「納得してくればそれで良い。それでな、私がお前に会いに行つたのはようやくお前をネギま！の世界と同調させる事に成功したからだ。まあ、そのために少々お前の身体を弄らなければならなくなつたが……」

「弄るって……俺に何をした？」

「それを今から話そうと思っていたんだよ。先ず、世界からの抑止力を抑えるには、お前をネギま！の世界の一固体の種として存在させなければならなかった」

「それで？」

「それで、何にしようかと思っていたんだが……その時にお前の容姿の元になった奴ってデュラスとして出てくるってことを思い出して、それなら丁度いいと……」

「……丁度いいと、なんだ？」

「お前の身体を悪魔化してみましたっ」

「……なに人の身体を勝手に悪魔化してんだよ！？俺は人外になりたいなんて思ってたんですけど！？今すぐ戻せ、きりき

り戻せ！！ 最後の は何なんだよ、気味悪いよ！！ もう、お前を殺して俺も死ぬ！！」

最後の方は俺も何を言っているのか分からなくなってきた。というか、もう…… ゴールしても、良いよな？

「わ、わかったから、謝るから！！ 目のハイライト消して、手に鉈もって近づいて来るのやめて！？」

HAHAHA ナニをイッテいるのヤアルアアア？ 痛イのーハサイショだあけネ スグニキモチヨクナルヨ？ わあたーしウソツカナイアルヨ。ダアカアルアア…… ダアイジヨウブルアアア

『ツバキ、今はそんな事よりも聞くことがあるのでは？』

…… チツ

どうやらルカ？ のおかげで命拾いしたな…… だけど、いつか絶対腹腸をひねり出して×××ドブに放流してやる」

「ねえ、最後の方聞こえちゃってるよ？ ×の意味無くなってるよ？ というかルカちゃん、今のを“その事”って酷くない？ もう少して変な趣味に目覚めちゃいそうな上に、本気で昇天しそうだったんだけど？」

『あなたはそのような事じゃ死にませんか？ それに仮にも神なんですから、とつくに昇天してると思いますけど？』

「ひどいっ！？ しかも“仮”の所で強調しなくても……。どこで育て方間違えたんだらう、お母さん悲しいわっ！！」

『ツバキ』

「え？ 無視！？ ああそうですか、そうですか。いいよ、もう。どうせ私なんか……」

「……え？ あ、ああ……カグラお前にはまだ聞きたいことがある。此処にいるこの女性はルカで間違いないのか？」

正直、非常に声をかけたくないんだが、ルカの口調が有無を言わせない感じだったので渋々声をかけてやることにした。だって、ルカめっちゃ怖いし、後ろに般若^{はんげ}が見えるし。

「ふん、誰がお前なんかにおしえ」チャキツ「すみませんでした、間違いないこの方はルカ様でございます」

……ルカさんや一体どこからその刀を取り出したんですか？ というか自分の“仮”にも生みの親に刀を向けるっていうのは……あつもしかして、これが反抗期というやつなのか？（断じて違うb
y作者）

「という事は、今のルカの姿が3rdモードなのか？」

「ああ、半分正解で半分外れ、だな」

「どういうことだ？」

「説明する前に、今お前がいるところがおまえ自身の精神世界だつて前に言っただろ？ つまり此処に存在するのはそのモノの精神体だけっていうわけだ、つまり」

「当然俺とリンクしているルカもここに居る訳と……んで、目の前にいるのはその精神体のルカって事か……いや、思念体の方が正しいのか？」

「察しが良くて助かる。んで、半分正解って言ったのは今ルカが持っている鏢^{つば}無しの黒い日本刀が本体ってわけだ。因みに本当はもう一本あって2本で一組になっている。能力はルカから聞いておいてくれ」

どうしても、良いがその目から流れている血涙とか止めてくれないかな。はつきり言って怖いし、きもい。

『お母様これを。これで顔を拭いてください』

「!？ ああもちろん拭かせてもらうさ!! やっぱり、ルカは私のことが嫌いじゃないんだな!! 母さんうれしいよ!!」

あ、お母さん設定とかまだ続いてたのか。

「……なあ、ルカ今渡したのって雑巾じゃないのか？ しかも別荘で使ってたトイレ掃除用のやつ……」

『ツバキ、この世には知らなくても良いことがあるんですよ?』

極上の笑顔とともにルカが俺にそう言った。俺には、言外でこれ以上は聴くなって意味と理解した……長生きのコツです。

「か、カグラ、俺の身体を悪魔化したって言っていたが、それについては何か支障は無いのか？」

「正しくはデユラス化だな。支障はこれといてないぞ？　むしろ良いことだらけだ。一応魔神の血筋にしたいし、悪魔とデユラス含む下位の魔法や物理攻撃を喰らっても傷どころか触れる前に魔法なら消滅して、物理攻撃ならある程度は跳ね返らせるという具合だ。まああるとしたら、デユラスという悪魔とはまた違った種を創つくったから、多少狙われ易くなるって事ぐらいだな。デユラス自体、数は1・000にも満たない希少種だし」

魔神という不気味なワードが聞こえた気がするが、敢えてスルーする。

「光の属性は使えるのか？」

一応悪魔だし、これで光が使えなくなりました。なんてことになったら、今まで研究してきた術式が全て無駄になるしな。

「問題ないぞ？　仮にもジェネラルクラス以上だし、力的にも四聖人と比べて雲泥の差だ」

「ほう……それは楽しみだな」

「そうだろう、そうだろうとも。もっと私を誉めてくれてもいいんだよ？　崇あがめよ、讃たたえよ！　この我を――！」

「なあ、ルカ3rdモードってどういう能力があるんだ？　それと、もう一本の刀のデザインとか教えてくれるか？」

「ええ、もちろんですともツバキ！　ええつとですね、先ずはデザインから――」

「ちょおおおつとすとおおおおおつぶーーーーー」

『「で？」』

「いやいや、で？　じゃないでしょ！？　で？　じゃあ！？　もつと他に言うことあるよねえっ！？」

『「別に？」』

「別につてひどい！　しかも、さっきからシンクロ率100%！」

『「いや、ルカとユニゾンの事できないかと思いやってみたんだが……ものは試しだな。特に問題もなくスムーズにできた」』

「へえ　つてえええええッ！？　そんな事できるようにした覚えなんてないんだけど！？　神様が驚かされるってどんだけ！？」

・
・
・
・
・

「んっ……はあ　　はあはあ」

『「……きしょっ」』

「普通に息切れしただけだよ！　はあ……最近どうも最初の頃と比べてキャラがぶれている気がする」

最初からだろ、という突っ込みは止めておく　俺って優しいな、うん。

一旦ルカとのユニゾン状態を解いて、そろそろ本題に入るべく、こちらから話を切り出した。

『それで話を戻すが、同調できたならさっさとネギまの世界に戻してほしいんだが?』

即刻エヴァの元へ帰って謝らないと、蠟人形ろうにぎょうにされてしまう……。

「もう少し会話を楽しみたいと思っていたが、気が変わった……もう、逝いつちまえよちくせう」

『わかった』

ん?　今「行いつちまえ」の部分に、俺とカグラとの間で齟齬そごがあったような……また何か企くんでいるんじゃないだろうな?　まあ考えても仕方ないしなんかあったらルカに頼むか。

この後俺の考えが甘かった事を痛感させられることになるのだが、この時はまだ誰も知る由もなかった。

「（ルカ、カグラの奴また何か企くんでいそうだからその時は頼む。）

」

『（了解です、ツバキ。それとも……今ここで絞めときます?）』

本当にこの子どうしたのだろうか……少し、いやかなりルカの今後が心配だ。早く性格を修正させないと手遅れになってしまう可能性が……若干手遅れ気味な気がしなくも無くも無いが、大丈夫だろ。

「おい、何してるんだ？ 逝くんじゃないのか？」

「（今は止めておこう）……今行く」

俺は、いつの間にか目の前^{……}に出現していた白い扉へ向かって歩いて行った。

もちろん、前回の二の舞を踏まないように足元にも注意を払ってだが。

……と何事も無く、安心して扉を潜ろうとしたところでアイツが聞捨てならない発言をした。

「あっそうそう。転送場所は数百年後のお前の研究室ね。既に廃都になってるから、どうなってるか知らんがな」

「……なっ!？」

『え……えっ!？』

俺もルカも唐突過ぎて一瞬何を言ったのか理解できなかった。

引き返って問い詰めようとしたが、カグラは予想していたのだろう……気付いた時には扉の向こうへ次飛ばされていた。

「それでは、引き続き異世界人生をごゆりと……」

薄れゆく意識の中、ニタァーと笑うそいつの顔をいつか絶対殴ると再び誓った――

・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

SIDE—ツバキ

気付くと俺は真っ暗な場所にうずくまっていた……そして、何故だか息苦しい。

そして、全身をひんやりざらざらとしたようなもので包まれているらしい……。息苦しいのもあって自然に息を吸おうと口を開いてしまった。そして、それがいけなかった。

「んあ んぐあっ?! ん っ——ッッッ!……!!
(なんだこれ、どうなってる!?! 口の中に何か……つか、苦しいっ! 死ぬっ死んじゃう!)」

『(ツバキ! 今魔力で結界を張るので待ってくださいっ!)』

・ ・ ・ ・ ・

数分後ようやく全身を魔力で包みこみという簡易的な結界を、ルカが作ってくれたおかげで窒息死は免れた。

「ぐああ！　ぺっ……し、死ぬかと思った」

『ツバキの場合不死身ですから、死にはしないですよ。しかし、そう考えたら……ゾツとしますね』

確かにゾツとする話だな。

「……ということは、ここは俺の研究室　で間違いないんだよね？　なんでまたこんな土まみれに……」

そう、俺を窒息死まで追いつめたひんやりざらざらの正体は土だった。しかも全方位土で覆われているところをみると埋め立てられたのだろう……廃都とか言ってたしな。

「とりあえずここから出なきゃな……ルカ、外に出られるルートを割り出してくれないか？」

『既に地上までのルートは確保済みです。今から図面に表示される目印を辿って掘って行って下さい』

地上、ね。一体何があったのか気になるところだが、一先ず地上に出るのが優先だな。エヴァは大丈夫だろうか……心配だ。

「さすが俺の相棒だ、心強いな」

そう言つと両腕をドリルに変形して目印を頼りに掘り進めていく。やっぱ、ドリルはロマンだな。

しばらくして、土質が柔らかくなってきたのが感触で解った。

『そのまま5m真つ直ぐ進めば地上に出られます。もう少しです、頑張ってくださいツバキ』

「ああ……つと、ちよつと待て上に何かいる」

地上まであとわずかなところで気配を感じた。おかしい、ここまで近づかなくとも察知できるはず……。それに、ここに送られた時から声が少し高くなっている様な？

『？ ……確かに、複数の反応がありますね。全員並み以上の魔力と質……手練の様ですね。中でも一人桁違いの魔力を持った者が厄介そうです。おかしいですね……。上に居るのは確かなんですが、正確な位置が把握できません。まるで、そこに居るのは分かるのにどこに居るのか分からないというか……。』

複数という事は冒険者なのかp？ それにしても、桁違いの魔力……俺の他にも転生者がいたりするのだろうか。可能性としては在り得る事なので、とりあえずは注意しておくに越した事はないだろう。それと、どうやらルカの方も何か異常が有るらしい。

「とにかく、先ずは地上へ出てからだな。お腹も空いてきたし可能だつたら少し食料を分けてもらうか」

話している間にも手は休まずに動かしていたので、地上はもう目と鼻の先だった。

「よつと」

勢いをつけて地上へ出てみると、どうやらそこは森の様でおまけに夜であった。一応、暗闇に目が慣れていたので明るい場所へ出た時のために身体に纏わせた結界に明るさの調整も付加しておいたのだが、杞憂に終わったらしい。

満天の星空が綺麗だ……が、まあそれはいいとして。どうやら、先ほど感知した集団の野営地点のど真ん中に出てきてしまったようだ。びつくりしたが、あちらも流石に予想外だったのかフリーズしている。

ごほんっ……まずは最初の挨拶が肝心だな、失敗しないようにしなければ　これ以上の失態は禁物だ。

「あ、えーと……こんばん「ザシュツ　バシャアアン」……………わへ？」

あ…ありのまま、今起こった事を話すぜ？

俺は目の前の彼らと友好的関係を結ぶために挨拶しようとしたら、空から鍋が降ってきたんだ！

な…何を言ってるのか分からないと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった…　魔術だとかま（ry

まあ軽い現実逃避はやめて、ここまでの経緯を整理してみよう。

カグラに地中に送られた？地上に誰かがいるらしいという事が分かった？誤って冒険者？の野営地点のど真ん中に来てしまった？挨拶しようとしたら、突然鍋が降ってきた。物凄く美味しい。(↑今ここ)

結論：神様（カグラ以外）俺が一体何をしたというのでせうか？

しかし、この鍋料理凄く美味しいッ……此奴できる！？……話が脱線した。とりあえずその事は置いておき、鍋を頭からどかすと更に吃驚^{びっくり}目の前に居るのはなんと紅き翼^{アラルブラ}だった。俺は動揺を隠すように“俺に頭から鍋ごとぶちまけたのは誰だ”と目線で訴えかけたら、黒髪ロングの優男——アルビオレで良いんだっけか？——が親切にも遠くにある崖を指差して犯人を教えてくれた。

俺は無言でそばにあった大剣を手にとると、元の持ち主であろう崖の上のおっさん^{崖の上のおっさん}に勢いよく投げつけた。——良かった、筋力はそのままの様だ——余りにも速度があつた為か空気摩擦で熱せられ赤い彗星の如く標的に着弾し見事崖先ごと粉碎した。一瞬やりすぎた感じがしたが“食べ物への恨みは怖いんだよ”と自分に心の内で正当化しておいた。紅き翼の面々が若干引いていたがそれはスルーだ、気にしちゃ負けた。

この白けた空気を変えるためにも、今できるとびっきりのスマイルで改めて挨拶をした。そのおかげか若干気まずい雰囲気が消え去れたみたいだった。笑顔って大切だね！何故か、眼鏡の優男が顔を真っ赤にしていたが何でだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9823m/>

巡る異世界記

2011年11月15日03時31分発行